

ことばの危機

— 入試改革・教育政策を問う —

はじめに

本冊子は二〇一九年一〇月一九日に行われた東京大学ホームカミングデイの文学部企画、シンポジウム「ことばの危機―入試改革・教育行政を問う―」の全記録です。

現在文部科学省を中心に、新テストの導入を中心とする入試改革、学習指導要領の改訂、高大接続、の三者を一体のものとする改革が進んでいます。これらはいずれも、高度に情報化した社会への対応、あるいは十八歳成人に向けた適応力の養成など、現代社会の課題に機敏に対処していくための施策であることはいうまでもありません。ただしその一方で、一連の改革の中で「実用」「情報」「論理」といった概念がともすれば一人歩きし、そもそも人間が社会で言葉を習得していくとはどのような意味を持つことなのか、異質な他者と出会い、コミュニケーションをはかつていくためにはいかなる態度が求められるのか、といった根源的な問題がなおざりにされているのではないか、という危惧を感じるのも事実です。

センター試験に代わる新テストの導入に関して、受験生の不公平や負担をどう減らすか、といった、いわば実施面をめぐる問題がマスコミを賑わせましたが、そしてもちろんそれも重要な問題ではありますが、その根底にあるより本質的な議論、つまり「読解力」とはそもそも何なのか、どのような学力が問われるべきなのか、といった課題がなおざりのまま、「改革」のかけ声ばかりが先行しているきらいはないでしょうか。

問われるべきは個々の動向のより背後にある社会の価値観であり、われわれは「社会の役に立つ」という通りのよい名目が一人歩きしがちな状況に、何よりもこれまで培われてきた学問研究を通して、異を唱えていきたいと考えています。

本企画では、文学部の教員四名が、それぞれ英文学、現代文芸論、哲学、古代中国語という専門領域から、「ことばの危機」ともいうべき現在の状況について問題提起を行い、それを踏まえた上で討論を試みました。白熱した議論はゆうに二時間を越え、ホームカミングデイとして、これまでにない盛り上がりを見せられました。参加人数はこれまででもっとも多く、アンケートの反響も含め、あらためて問題の重要性を再認識させられた次第です。

おそらくわが東大文学部の使命は、ヒトが言葉を用い、文字を使い始めて以来抱え続けてきた不易の課題を、現代の視点から改めて問題提起していく点にあるのでしょうか。目先のわかりやすさ、通りやすさの名の下に先人たちの知恵が軽視されていく風潮に警鐘を鳴らしていく点にこそ、われわれの社会的使命があるように思われます。

今回こころよくご協力頂いた四名の先生方、総務チーム、情報管理室の担当者の方々に、あらためて御礼申し上げます。次第です。

東京大学文学部広報委員会

委員長 安藤 宏

目次

はじめに

ご挨拶

1

ディスカッション

5

登壇者

阿部 公彦 文学部教授・英語英米文学

沼野 充義 文学部教授・現代文芸論

納富 信留 文学部教授・哲学

大西 克也 文学部長・中国語中国文学

司会 安藤 宏 文学部教授・日本語日本文学（国文学）

ご挨拶

司会 安藤 宏



定刻になりましたのでただいまから二〇一九年度東京大学ホームカミングデイの文学部企画として、シンポジウム「ことばの危機」―入試改革・教育政策を問う―を始めたいと思います。

あいにくのお天気ですけれども、内容を精一杯盛り上げていきたいと思っております。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

まずシンポジウムの趣旨につきまして、司会の安藤のほうから簡単にご説明させていただきます。

今般、文科省を中心に、高校・大学に関する三位一体の教育改革というものが進められています。その三位のうちの一つは、まず現在のセンター試験にかわる新テストの導入。これは、英語の民間試験の導入を巡っている議論を呼んでいますけれども、それももちろん重要なのですが、実は国語、教科としての国語に関しても、かなり問題含みなのではないかと、私は個人的に思っています。

これまで公開されてきたモデル問題、あるいはプレテストの内容を見ますと、例えば駐車場の契約書であるとか、生徒会の規約を読ませたりとか、従来の「国語」という教科の内容とはかなり趣の違うものになっていて、「実用」重視の内容です。

もう一つは、指導要領の改訂。これも、企画書のつくり方であるとか、「論理」と「実用」が重視されておりまして、小説であるとか、文学的な教材は、教科書も別扱いになります。危惧されるのは、『舞姫』、『山月記』、『こころ』であるとか、そういう国民的な名作として親しまれている小説を読まずに卒業していく生徒が、今後結果的にふえてい

くことが予想されている。

それから三つ目は、高大接続の問題がありまして、社会に送り出すところから逆算して、高校・大学のカリキュラムに一貫性を持たせようという、そういう方針が打ち出されています。

これがいわゆる三位一体改革の内容なのですけれども、いずれも密接に関連しております、一言で言いますと、実用国語化の動き、と言ったらいいのでしょうか。成人年齢の十八歳引き下げとか、情報化社会への対応とか、いろいろ背景があるわけですが、一言で言うと、実学の論理というものが全面的に押し出される結果になっている。その結果、高校の国語という科目から文学的な内容、あるいはもう少し広げて人文学的な要素がどんどんそぎ落とされていく結果になっている。

もちろん社会に役立つ実践的なトレーニングというのは大変重要なことなのですが、その分、世界、あるいは社会のあり方そのものを根源から問い返していく「人文知」と言ったらいいのでしょうか。そういう本質的な思考能力がなござりにされてしまうおそれがあるのではないか。実はこの問題は、高校だけではなくて、我々の大学の学問、特に文学部にとって、死活問題につながるような要素を含んでいます。

そういうわけで、きょうは、本来必要な国語の力、文章を読む読解力とは、そもそもどういうものなのかということとを、改めて原点に立ち返って考えてみたいと思うわけです。

本日ご登壇いただいているのは四人の先生方でありまして、いずれも、我が文学部の誇るつわものぞろいです。皆様よくご存じの方が多いとは思いますが、改めて簡単にご紹介させていただきます。

私の右側から順次ご紹介いたしますけれども、まず阿部公彦さん。同僚ですし、きょうは先生という言葉はやめて、できるだけ「さん」づけで行こうと思います。阿部公彦さんですね。専攻は英文学で、本日のこのシンポジウムのテーマには絶対に欠かせない方だろうと思います。新テストの英語のあり方について、これまでも強い憂慮を、さまざまな形で表明されています。一方国語に関しても、最近さまざまなメディアを通して、積極的に問題点を指摘していらっ

しゃいます。

それからそのお隣が沼野充義さん。専攻はロシア・ポーランド文学で、文芸評論でも文壇に重きをなしていらっしゃいます。ご所属は、現代文芸論。越境という概念をテーマに、幅広い角度から世界文学の研究をしてこられました。沼野さんは文字通り文学部の重鎮でありまして、実は今年度で定年退職されるのですけれども、今回こういう企画を考えているんですがと相談しましたところ、これを機会にぜひ言っておきたいことがあるんだと。企画がなければ、自分で企画してやるつもりだったと（笑）おっしゃってくださいまして、大変心強く思っております。

それからそのお隣が納富信留さん。専攻はギリシャ哲学でありまして、以前実は私、新聞の書評のお仕事で一緒にしていたことがあるんですけども、実に博学多識でいらして、物事の本質を見通す力に圧倒されたような記憶があります。今回ご専門分野から考えて、ある意味では比較的客観的にこの問題をごらんになれる立場にいらっしゃるのではないかと思います。ぜひ来ていただきたいと思っております。

それから一番端になってしまいましたけれども、大西克也さん。専攻は古代中国語です。現在文学部長、大学院人文社会系研究科長をお務めです。実は、毎年この文学部企画のシンポジウムでは、冒頭で学部長に基調講演みたいなことを、短い時間ですけど行っていたのが恒例なんです、ご相談しましたら、大西さんは私の知る限り歴代学部長の中で最も謙虚な方というべきか（笑）、今日はあえて一研究者としてこの問題について考えてみたいんだというので、パネリストの席に座っていらっしゃるわけあります。

それから、申し遅れましたけど、司会は私、安藤が務めます。専攻は国文学で、日本の近代文学を専攻しております、高校の教科書づくりにも携わっています。なので、まさにこの問題は人ごとではないというか、ですからあまり熱くならないように、進行役に徹したいと思っております。

本日の進行ですけれど、まず最初にパネリストの皆さんに、それぞれ、大変限られた時間ではありますけれども、問題提起をしていただきたいと思います。その上で、それを踏まえて、あとは、フリーディスカッション、実は何も

打ち合わせで決めておりません。多分このメンバーだったら会話が途切れることはないだろうという気がしますので、
談論風発、お互いの話からいろいろ問題点を引つ張り出して、建設的にお話し合いをしていただけるのではないかと
思っています。発表はお一人十五分が一応の目安。限られた時間で恐縮ですけれども、ご協力をお願い致します。そ
れでは、早速始めたいと思います。
阿部さんからどうぞよろしく。



ディスカッション

登壇者 阿部 公彦 文学部教授・英語英米文学

沼野 充義 文学部教授・現代文芸論

納富 信留 文学部教授・哲学

大西 克也 文学部長・中国語中国文学

司会 安藤 宏 文学部教授・日本語日本文学（国文学）

阿部公彦教授…阿部と申します。よろしくお願ひします。私はきょうの話では、「読むこと」というキーワードにフォーカスを当てて考えてみたいと思います。ただ、大きな枠組みが「読むことの危機」ですので、そうするとどうしても「読解力がない」といった方向に話が行き、さらに読解技術がどう足りないかといった話題になりがちです。私はこのところ英語に関して発言することが多く、そこでは会話ばかりやっていてもだめだといったことも結構言っていますので、今回は「読解力をもっとやれ」といった発言をするのではないかとお思いの方もおられるかもしれません。ですが、今日はそういう話ではないです。

今日お話ししたいのは、「読解力の危機」を考えるにあたって、どのようなことを前提とすべきかということですが、読解力問題というのは、どうも話がみんなかみ合わないことが多いのです。そもそも話の前提が食い違っているために、「危機」の対策を練ろうとしても、なかなか「そうだ、そうだ。よしこれをやろう」という方向に行かない。そこが今回の入試の騒動とも関係しているし、例えば新しい学習指導要領の問題ともつながってくるのではないのでしょうか。

で、何が問題かというところ、読むことの危機といったときに「個人の技能」に話を収束させていいのかということです。これは人情としてはしようがないと思うんですけども、そういう形でまとめると、矮小化につながってしまうかもしれない。

そもそも読解力がないというのはどういう状況でしょう。今、こちらにお示しした新井先生のご著書などでも、「子供たちが教科書を読めない」ということが強調されている。象徴的な例だと思えます。そう言われると、「わ。大変だ」と思えますよね。新井さんは今の読解力ブームをつくった最大の功労者の一人だと思えますけれども、そこに敬意は表しつつ、ちょっと絡んでみたいところもあります。



この本で気になるのは、読めていないということをやや単純化して、だからテストで

はかるとか、あるいは技能を鍛えるという発想になっているところですが、こうしたとらえ方では、実はあまり問題の解決につながらないのではないかと私は思っています。

ではどうすればいいか。そのときに、考え方として、文章が読めないということを「事態」として考えてみたらどうかと思うのです。特定の誰かのスキルがないと個別化するのではなくて、読めないという事態が、社会全体の中で問題になっていると考えるかどうかということですが。

まだわかりにくいかもしれませんが、もう少し言うと、読者とテキスト、あるいは個人と環境の間にこそ本当の読解問題があるのではないかということです。こういうアプローチは決して珍しいものではありません。アフォーダンスとか、エコクリティシズムとか、つまり個人と環境の間で起きていることを相互的なものとして理解し議論するというアプローチです。そうすると、今まで見えにくかった問題が可視化される。

そのあたり今年の「現代思想」の5月号にエッセイを書きました。二五枚とか言われたのに五〇枚ぐらい書いたにもかかわらず全部載せてくれた編集長に感謝したいと思えますけれども、こういうものです。

少し長目なのですべてを紹介する時間はないと思いますが、そのエッセイだけお話ししたいと思います。ハンドアウトをごらんいただけるでしょうか。「読解力がない！」の実態ということで、私のハンドアウトの一枚目にリストを載せてあります。

このリストで示したのは以下のようなことです（資料1）。××に読解力がない！と誰かが文句を言っている状況があったとします。そういう状況をあらためて実況見分してみると、いろんな原因が想定されるのです。例えば、これもざっと見るだけだと思いますけれども、基本的に語彙がない、文法がわからない、というレベルがまずある。つまり非日本語話者が日本語が理解できないような形で読めていないというケースが当然あるわけです。これから日本語を母国語としない方がたくさん日本国内に移住するということも起きるかもしれません。日本語がもともとできない人であれば、今あげたような問題が生ずる可能性も高いと言えるでしょう。それ

を①番としてここに挙げておきました。

次にあげたのは、書き手の側が明らかに工夫が足りなくて誤解が生じているという場合です。新井先生のご著書の中でよく問題に取り上げられていた教科書の文章というのがありましたけれども、あれの少なからぬ部分は書き方がまずいのではないかという気が、私はしていました。で、その書き方のほうを放っておいて、読む方の「読解力」ばかり問題にするのは正しいのかということです。あるいは、共通テストで出題されつつあるある種の法律の文章とか、ある種の契約書とかというのも、果たしてその書き方でいいんだらうかということがありうる。ですから書き方に合わせて読み方を無理やり矯正していくというよりも、こうした問題は実は双方向だということを再認識して、書き方も何とかしなければいけない、というふうを考えてみたらどうかと思うの

1. 「読解力がない！」の実態

- ①【読み手】そもそも基本語彙や文法知識が足りず、読む人が言葉の仕組みを理解できていない。
- ②【書き手】書き手の側の工夫が足りず、誤解が生じている。
- ③【読み手】読み手が誤解や曲解を行っていたり、あるいはイデオロギー的に受け付けず特殊な読みをしてしまうために、内容の理解がずれる。
- ④【読み手】読み手の不注意や怠慢の結果、読むべき内容を読んでいない。
- ⑤【読み手】読み手が文脈をとりちがえ、ニュアンスを読み損ねたり、意味の方向を読み取れていない。読み手がどこまで「裏」を読むかで判断を誤り、過剰に意図を読んだり、逆に、全然意図が読めていなかったりする。
- ⑥【もうひとりの読み手】読み手の周囲にいる人が、自分の読みとずれる「他者の読み」を許容していない。「どうして私と同じように理解できないのだ！」とイライラする。自分の読解の「正しさ」への過剰な信頼を持っている。「他者とは異なる読みをするもの」という視点が欠如している。
- ⑦【他者性】他者の言葉の根源的なわかりにくさが突きつけられている。
- ⑧【内容】内容が難解である。読み手にとってレベルが高すぎる。
- ⑨【書き手】特定の文章表現に内在する「胡散臭さ」への拒絶反応のために読めない。

*【もう一人の読み手】⑥とは逆に、別の読み手の「読み」に引きずられすぎて、自分の主体的な「読み」ができなくなっている。

資料 1

です。工夫の余地はまだまだあると思います。

三つ目はちょっと微妙で、アカデミックにはおもしろい問題なんですけども、読み手が曲解や誤解を行って、何かイデオロギー的に捻じ曲げて理解してしまうという場合です。これは政治的な場所ではよく起こることです。現実的にはよく起こることなんです。

四つ目、これは読み手の不注意や怠慢の結果、内容の全体や飛ぶべきリンクなどを読まず、ヘッドラインだけで内容を理解してリツイートしてしまうといった場合です。こういうことはよくあるように思います。要するに情報処理のための手続きをちゃんと踏んでいるかどうかということです。センター試験レベルのテストでどうしてもこのレベルの問題は多くなりがちですし、新しい共通テストの国語もこうした方向に偏っていると思えます。要するに注意力のテストです。新井先生ご推奨の RST なんかも、このレベルで一番機能するということだと思います。ただこの注意力のテストに過ぎないものを読解力のテストと同一視してしまうのは危険かなとも思います。現代社会ではたしかに注意力が大事で、注意力のある人こそが出世する傾向にあります。だからそこを大事にして鍛える必要もあるとは思いますが、配分的には三割くらいいいのではないのでしょうか。エフォートで言うと、三〇%くらいということですね。

次に五番目ですこれは文脈をどれくらい理解しているかという問題です。だから同じ言葉でも、裏を読んできくと幾らでも別の意味になり得るといのが言葉の不思議なところ。例えば「きょうは暑いね」と言っても、本当に暑いと言っているだけの場合もありますけど、「きょうは暑いね。だから窓をあけて」という場合もありますし、「きょうは暑いね」というのが嫌みである場合もあるかもしれません。つまりそれは文脈によって言葉の意味がどんどん変わってくるということで、その裏をどう読んでいくかというところは非常に微妙で、多分ちょっとテストが高度になるとそこが試されるんだと思いますね。だから二次試験レベルになるとそういうところが試される。

その次にくる⑥はとても大事です。これは、もう一人の読み手を念頭において読解力を考えるということですが、周囲にいる人が、自分の読みとずれたことを言うかどうか感じるか。しばしばどうして俺と同じように理解できないんだ、書いてあるじゃないかと怒るわけですね。確かに、そうしたときに、「何で理解できないんだ」と怒っている人が正しい読みをしていることも結構あります。でも、間違っているかどうかというのはこの際、棚上げしてもいいのです。問題は、たとえこちらが正しくても、それを間違っているかどうかがどういふことを理解するのが非常に大事なことなのです。多分実際に会社でもそういうことは起こりえます。例えば商品の説明などを用意する人は、そういったところに一番気をつけなければいけないわけです。これを正しく読めばこゝろではあるけれども、間違っている読む人がいるかもしれないという想像力をいかに身につけるかということが大事になる。そういう場はあると思うんですね。でも言うが易し。なかなか難しいことです。ネット上のケンカなどを見ていると、「何でこれがわからないんだ！」といった諍いが発端になっていることが多い。環境が違ったり、さまざまな理解のバックグラウンドが違っていると、違ふうにしか理解できないという人はどうしてもいるわけです。それを受け入れられるようになりたい。そういう我慢強さが時には必要になります。

その次は他者性のことです。そもそも文章というのは他者の言葉なので、わかりにくいものだから、あるいは内容がそもそも非常に難解でわかりにくい。あるいは⑨も意外とあるんですけども、何か、人間というのはうさん臭い文章にひゅつとこう本能的に反応するセンサーを持っている。そういう胡散臭さに反応して「もうとても読めない！」という気分になるのも、一種の読解力のあらわれとともにもいいのではないかと思います。嗅ぎつける力です。

というわけで、とりあえず9プラスアルファぐらいリストアップしたんですけども、こういう形で微分化していくと、読むという行為はいろんな状況の中に構造化されているということがわかってきます。「読めない」というトラブルを解消するためには、もちろん個人の技能をスキルとして鍛えればうまくいくこともあるでしょう

が、それだけでなくて、どういう回路で誰かが読めないという事態が生じているかというのを、個人と環境との双方に目をやりながら解決していかないとうまくいかないことがけっこうある。そのほうが社会全体にとつては意味があると思いますし、特に⑥みたいな問題に関しては、もっと議論されていいのかなと思っています。

そういうことを踏まえて、ではどうすればいいかと。例えば国語の時間でどうすればいいかとか、あるいは、中等教育でどうすればいいかというのを、残りの時間で考えていきたいわけです。そこで私が一つ提案したいのは、既にもちろん、そんなことは当たり前としておやりになっているという方は多いと思いますけれども、文章というものがいるんな要素を抱え持っていて、文章を読むというのはそうしたわやわやしたさまざまな要素と出会うことを意味するのだということであらためてみんなで再認識するということだと思います。

これは文章の「奥行き」と呼んでもいいものだと思いますが、そうしたものは「いじる」ことで可視化されることが多いです。一見何の変哲もないもの。例えば、学習指導



要領でよく言及される「論理的な文章」なるもの。正直、論理的な文章とか実用的文章が本当にあるのか微妙ですけども、でもそういうものがあつたとして、でもそういうものの中にさえ、実はいろんなものが隠れていて、ある意味ではおもしろい。文科省で論理国語の導入に尽力された大滝さんという方は、論理国語ではノンフィクションをやるんだと強調されておられますけど、そうした淡淡とした文章を逆に思いきり文学的に読んでみるという試みをしていいわけです。文学的にというと、誤解が生じるかもしれませんが、そこをこれから説明します。そういうことをすることで、文章とのつき合い方が鍛えられると私は考えているわけです。まずはこの法学部の教育研究目的というやつですね。別に法学部の悪口を言うとか、そういうつもりは全然ありません。素材は文学部でもよかったですけども、たまたまこれが手元にあつたので。

それからその後、ガトーシヨコラのレシピをちよつと読んで、あと時間があれば森鷗外の『渋江抽斎』も見ていきたいと思います。

お手元のハンドアウトに載せた法学部の「研究教育目的」には、こんなことが書いてあります（資料2）。「法学・政治

2. 教育研究目的 (東京大学法学部)

専攻課程・学部	教育・研究の目的
総合法政専攻博士課程	法学・政治学の分野において、理論的・歴史的な視野に立って精深な学識を養い、専門分野における独自かつ高度な研究及び応用の能力を培うことを目的とする。
総合法政専攻修士課程	法学・政治学の分野において、理論的・歴史的な視野に立って精深な学識を養い、専門分野における研究及び応用の能力を培うことを目的とする。
法曹養成専攻	社会に貢献する高い志と強い責任感・倫理観を持ち、先端的法分野や国際的法分野でも活躍しうる、優れた法律実務家を養成することを目的とする。
法学部	法学と政治学を中核とした教育研究を通じて、幅広い視野をそなえ、法的思考と政治学的識見の基礎を身に付けた人材を養成することを目的とする。

(東京大学 HP より)

資料 2

学の分野において、理論的・歴史的な視野に立って精深な学識を養い」などと。こういうものを共通テストに出して試験したいのですね。もちろん出した方がいいとは思いますが、その前にいろいろ考えてみたい。

皆さんはこれを見てどう思われるでしょう。さっき文章をいじると言いましたけれど、文章をいじるときは幾つかのコツがあります。その文章の個性とか、裏とか、ニュアンスとか、そういうものを読んでみたい。それが「文学的に読む」ということの意味です。

よく文学テキストを読むときの分析の手段として使われるのが、その文章のこだわり部分を見るところです。これは人間を相手にするときと同じです。人間も、その人のこだわりの部分を見ると性格がわかると言われます。その人が好きなものとか、あるいは逆に嫌いなものとか、その人の地雷みたいな部分。そういうのを見ていくと、あ、この人はこういう人なんだと。文章もそういうところがあります。

どうですか。幾つか特徴がありますよね。まず抽象的で、何か寄せつけない感じがするとか。主語がないとか。そうすると何か、超越的権威を感じさせるわけです。それから、「養う」「培う」など、同じような言葉が連続して出てくるんです。結構よく見てみると。みんな、大体同じ。「つくる」系の言葉。大学だから当たり前なのかもしれない。大学は、要するに何かを「つくる」。そこをいろいろ言いかえているんですね。「養う」とか「培う」と。

その結果言ってみれば「行為的」な感じがすごくする。実力行使的。もつとと言うとマイルドな暴力性さえ感じなくもない。暴力性といっても、制御された暴力なので、やたらめったら暴れ散らすという意味での暴力ではないですけどね。それから、命令的、規定的、どこことなくお偉そうで、何か威張っている感じがする。文学部のも多分威張っていると思いますけども、こういうものは大体威張るんですね。

逆に言うと、何でこういうのって威張るんだらうというのはおもしろいですね。もつと低姿勢であってもおかしくないんですけども。「やったらびびっ」みたいな書いてあってもおもしろいと思うんですけど(笑)。

それから今の4ともつながってくるんですけど、やはり簡条書きにするんです。こういうときは。簡条書きのレトリックというのをおもしろい。マニフェストがきれいに整序されて並び、三行ぐらいでまとめてあって、内容もちょうど似たような着目点で書いてある。

そうすると、不思議と権威が生まれるんですね。簡条書きと権威というのはすごく相性がよくて、簡条書き研究というのをどなたかやってくださるとおもしろいと思うんですけど。何か立法感がある。法学部だから言っているわけではないですけど、何だかまるで法律がそこにそびえているように感じさせる。揺るぎない感じとか。別の言い方をすると聞く耳を持たない感じとも言える。

それから「精深」なんていう言葉はほとんど私使ったことはないんですが、これははじめとして高い、優れたなどの、程度の甚だしさを強調した言葉も多いですね。英文学的な用語で言うと、すごく「崇高」な感じがする。ある時期から近代の美学の中で、サブライムなものとビューティフルなものというのが対立概念とされてきました。小さくまとめていて、秩序立っていて、美しいものに対し、何かこう屹立して、果てしなくて、無限な感じがするものがある。ロマン派のころにはそういう「サブライム」なものがとても大事にされたわけです。この場合、そこまでサブライムではないと思いますが、やはり卓越したものへの憧れはありますね。

程度が甚だしいとどこか無限な感じがして、はるか遠くて、最終的には理解不能なんですね。だからどこまで行ったら果てしなさが終わるんだろうと。ある種の意味不明感とか、ロマン主義的な感じというのも出てくるかなという感じはしました。

ということ、ごく事務的な文章にも見える法学部のこの「教育研究目的」を見ても、ある種のニュアンスが読み取れるなどということがあるわけです。そういうものを踏まえて、さらに例えば、ではこれからはこれをこういふふう書いていこうとか、あるいはこれをこういふふうに取り扱ったらいけないかという反応がまた出てくるという気がします。

次の例として挙げたいのがレシピで、これも意外とおもしろい(資料3)。やや極端な例ではありませんが、でも経験のある方はわかると思います。英語で料理の教本とかお菓子のつくり方とかを見ると、非常に淡々と書いてあるんですね。

これがその例ですけれども、「Preheat oven to 350 degrees Fahrenheit (中略) Lightly grease and flour one 9x13 inch pan or two 9 inch round pans.」というふうにごく事務的にやってくる。ただ指示が書いてあるんですね。これは、料理のつくり方に限らず、英文の指示書というのは、割とそういうふうな合理的に、淡々と書いてあることが多いです。で、日本語のレシピをみてみましょう(資料4)。「クックパッド」から拾ってきたものです。どうでしょう。ああ、レシピってこうだよねとお思いになる方も多いかもしれない。読んでみましようか。「あたためた生クリームを加え、チョコとバターを溶かす。そーっと混ぜてくださいね。♪」。この音符印をどう読んでいいかわからないんですけど。「生クリームはレンジであたためOK!」とか、こ

3. Devil's Food Cake

Directions

1. Preheat oven to 350 degrees F (175 degrees C). Lightly grease and flour one 9x13 inch pan or two 9 inch round pans.
2. In a small pan melt the butter or margarine with the unsweetened chocolate. Set aside to cool slightly.
3. Cream together the sugar and the eggs until light in color. Add the chocolate mixture to the eggs and temper mixture by beating well (so you don't end up with scrambled eggs!) Add 1 cup boiled water (still warm) and blend well. Mixture will be very liquid.
4. Mix together the flour, baking soda, and salt. Add this mixture to the chocolate mixture and blend well.
5. Mix together the vinegar and the milk and stir into the chocolate batter. Pour into prepared pan(s).
6. Bake at 350 degrees F (175 degrees C) for 30 minutes or until a toothpick inserted in the center comes out clean. Cake divides well for filling with mousse, or ganache, or black forest fillings. The best clue to this cake being nearly done is that you will start to smell the aroma of chocolate filling your house!

from:

<https://www.allrecipes.com/recipe/7349/devils-food-cake-i/?internalSource=staff%20pick&referringId=835&referringContentType=recipe%20hub>

資料3

から、これは個別の文章としても考えたらおもしろいと思うんですけども、日本語の文章につきまとうある種のニュアンスがある。

そもそも対人関係のつくり方が日本語では違う。文章というと、所詮文章は文章だから、人間は関係ないだろうと言いたくなるかもしれませんが、文章もやはり読者と書き手の間の対人関係というのを反映するわけですね。我々が英語でしゃべるときと日本語でしゃべるときでは明らかに対人関係の距離感が違ってくる。書くときにもそれが反映するんですね。そこに何かあるのではないかと。あるいは、指示書思想がそもそも違うのか。指示するということが何か違うニュアンスを持っているのではないかとということにも考えが及びます。

また、どなたかアイデアがあったら教えていただきたいんですけども、命令形の問題というのもあります。日本語の命令形というのは、英語の命令形とちよつとは意味合いが異なる思うんですね、ニュアンスが。というか、英語の命令形というのは道路標識でも何でも「とまれ」とか、「行け」とか、「曲がれ」とか、すごくシンプルに内容をとらえるんですけども、日本語で「行け」と言われると、何か本当に行けと命令、威圧されている感じがするんです。ニュートラルな命令というのが、日本語にはないのではないかと。そこが英語との違い。そんなことを私はかねがね考えていたのです。このレシピを見たついでに、このこともちよつと問題提起しておきたいと思っています。

これをよく感じるの詩を読んでいるときで、私は専門が英語の詩なので、入門の授業などで学生さんと一緒に読むことが多いんですけども、そういうときに、学生さんがピンと来ない。つまずくのはやはり命令形のところなんですよね。命令形とか呼びかけとかですね。そういう強い言葉の表現の仕方を受け入れにくいのが日本語の構造としてあるのかもしれない。ぼんやりとした言い方ですみませんけども、そこを覚えておきたいと思っています。呼びかけモードとか、そういうことですね。

というような問題提起をして、そろそろ時間ですので、締めくくりにしたいと思いますけど、最後、あと一分

4. 本格★濃厚ガトーショコラ☆

(「クックパッド」より <https://cookpad.com/recipe/2827120>)



あたためた生クリームを加え、チョコとバターを溶かす。そーっと混ぜて下さい♪

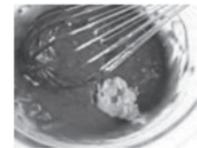
★生クリームはレンジであたため OK!

7



滑らかになったら卵黄を加え、混ぜる。

8



プラリネペーストがあればここで加えます。

★入ると、ナッツの風味とコクが出ます♪おすすめ☆

9



資料4

ぐらいで終わりにしますが、森鷗外の『渋江抽斎』というのがあって、鷗外の最高傑作だとかいう人もいる一方で、退屈でつまらない、地味だとか、味気ないとか言う人もいます。たしかにこれ、ある種の事務的文章の典型のようなところがあります。収入とか縁戚関係が中心で要するにお金と人名ばかり出てくるんですね。幾ら給料をもらっていたとか、誰それが誰その縁者で、誰それが誰その子

抽斎の碑の西に渋江氏の墓が四基ある。その一には「性如院宗是日体信士、庚申元文五年七月十七日」と、向って右の傍に彫ってある。抽斎の高祖父輔之である。中央に「得寿院量遠日妙信士、天保八酉年十月二十六日」と彫ってある。抽斎の父允成である。その間と左とに高祖父と父との配偶、夭折した允成の女二人の法諡が彫ってある。「松峰院妙実日相信女、己丑明和六年四月二十三日」とあるのは、輔之の妻、「源静院妙境信女、庚戌寛政二年四月十三日」とあるのは、允成の初めの妻田中氏、「寿松院妙遠日量信女、文政十二己丑六月十四日」とあるのは、抽斎の生母岩田氏縫、「妙粟童女、父名允成、母川崎氏、寛政六年甲寅三月七日、三歳而夭、俗名逸」とあるのも、「曇華水子、文化八年辛未閏二月十四日」とあるのも、並びに皆允成の女である。その二には「至善院格誠日在、寛保二年壬戌七月二日」と一行に彫り、それと並べて「終事院菊晚日栄、嘉永七年甲寅三月十日」と彫ってある。至善院は抽斎の曾祖父為隣で、終事院は抽斎が五十歳のとき父に先だって死んだ長男恒善である。その三には五人の法諡が並べて刻してある。「医妙院道意日深信士、天明四甲辰二月二十九日」としてあるのは、抽斎の祖父本皓である。「智照院妙道日修信女、寛政四壬子八月二十八日」としてあるのは、本皓の妻登勢である。「性蓮院妙相日縁信女、父本皓、母渋江氏、安永六年丁酉五月三日死、享年十九、俗名千代、臨終作歌曰」云々としてあるのは、登勢の生んだ本皓の女である。抽斎の高祖父輔之は男子がなくて歿したので、十歳になる女登勢に婿を取ったのが為隣である。為隣は登勢の人と成らぬうちに歿した。そこへ本皓が養子に来て、登勢の配偶になって、千代を生ませたのである。千代が十九歳で歿したので、渋江氏の血統は一たび絶えた。抽斎の父允成は本皓の養子である。つぎに某々孩子と二行に刻してあるのは、並びに皆保さんの子だそうである。その四には「淡江脩之墓」と刻してあって、これは石が新しい。終吉さんの父である。

資料 5

供。その究極のシンボリックな場面が、ここに、皆さんのお手元に印刷したお墓のシーンで、ひたすらお墓に刻まれた文字を読み上げていくんですね（資料5）。ただ、実際には、ずーっと続けて読んでくると、一回目読んだときはあまりピンと来ないということもあり得るかもしれませんけれども、全く味も素っ気もなさそうな名前の連続のところから、何か生命的なものが立ち上がってくる。そんな感じがあるんですね。

そういうところ、深入りするとまた時間がかかってしまいそうなのでこれくらいにします。森鷗外の『渋江抽斎』というのは、一見事務的な文章と見えるものから生命が立ち上がってくるところに、まさに鷗外の独特の筆致があつて、そこが楽しみどころになっていてそここそ文学作品としてのしづとい味があるということを強調して終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

安藤 宏教授：どうもありがとうございます。とても興味深いお話でした。キーワードは「ニュアンス」ということだと思っただけですけど、「ニュアンス」を読み取っていくのは、結局は我々の想像力の問題なんですよ。極端な話、「雨の降る日は天気が悪い」と、これだっけ一行詩になるわけです。ただ事実を言っただけでも、日常の味気なさとか、倦怠感とか、そういうものを読み取っていくことができる。文科省の指導要領に準ずる、指導要

領解説の中で、結局途中で引つ込めた表現なのですが、当初、「論理国語」という教科は、「非文学」でなければいけないという指標があつた。だけど阿部さんがおっしゃったように、そつけない、事務的な文章だつて、我々の想像力でいくらでも文学にできてしまうわけですよ。文学とそうでないものの境界なんかないんだということを改めて思いました。ちなみに法学部の方、他意はありませんのでお許しください（笑）。

では、次は沼野さん、お願いします。



沼野 充義教授…いろいろお話ししたいことはあるんですけど、せっかくシンポジウムで、皆が同じ場に座っていますので、少しレスポンスから行きましょう、忘れないうちに。きょうの本題から少しずれるかもしれませんが、阿部さんが出された日本語の命令形の話ですね。語学の専門家同士だからこういう話題になってしまわないけれど、英語とは違ってそもそも日本語で命令形を使うのは難しいんです。車を運転をする人でないとかからないかもしれませんが、昔私が高速道路で車を運転しているときに見た道路標識で、「左折の方は左に寄れ」というのがあったんですね(笑)。

何が問題かというところ、日本語ではこういう標識の場合、「左折禁止」とか、「一時停止」とか、漢語で言い切るのには格好いいんです。それが実質的な命令形になる。でも、「左に寄る」ということを漢語で何と言ったらいいのかわからない、中国語を専門とされている大西先生にうかがいたいくらいですが、通常の日本語の語彙の中の漢語では言えませんね。そんなわけで、「左折の方は」までは丁寧な言いかたなのに、その先が「左に寄れ」という乱暴な命令形になって、ちぐはぐで可笑しな文になってしまう。

それから、阿部さんの話には料理も出てきましたが、料理のレシピの指示は、やはり各国語にそれぞれ特徴があって、例えばロシア語だと普通、動詞の命令形ではなくて不定形を使うんです。これは一般的にやるべきことを示す、一種の弱い命令で、「料理文」とわざわざ呼ぶ語学の専門家がいます。日本語のレシピは普通なものだと、基本的には「みじん切りにする」「ゆでる」「炒める」といった具合に、やはりやはり動詞の終止形を使いますね。「混ぜなさい」「ゆでなさい」とか、絶対に言わないでしょう。



我々大学教員も試験問題をつくる仕事がありますが、命令をどう言うかはやはり悩ましい。「次の文を読んで要旨をまとめよ」と言えばいいのか、いやそれじゃちょっと偉そうだな、もう少し優しく「まとめなさい」のほうがいいだろうか？ いや、いつその

こと「まとめてみましょうか」(笑)、いやこれでは試験問題になりませんね。無意味な余談と思われたかも知れませんが、言葉の使い方というのはこんなにも微妙で、しかも英語と日本語の間で簡単に置き換えることができないものがいっぱいある、ということなのです。

それでは本題に入ります。きょうは、私以外の先生方はみんな文学部の学問を極めている重厚な学者の方々に、真面目な話に傾きがちだと思つたので、私は、別に不真面目というわけではないんですけど、少し楽しい、気分転換になるような話題から始めます。

スライドの写真をご覧ください。こんな写真が何の関係があるのかと、びっくりされるかもしれませんが、これは、現代ロシアで国会議員として活躍しているまだ四〇前の若い女性です。元クリミアの検事総長だった有名な人で、ナタリア・ポクロンスカヤさんといいます。ネット上に写真が出るとすぐに人気が燃え上がって、「萌え絵」というのでしょいか、漫画風のイラストまでネット上に出回っています。

なぜこの人がここに出てきたかというと、この人は、ある失言のせいで最近、ネット上で炎上してしまつたんです。その理由がちよつとすごい。あるラジオのトーク番組に出演したとき、彼女はロシアの名句を引用したんです。「ほら、『お勤めはしたいけれど、お仕えするのはうんざりだ』って言うでしょ？ ロシアの偉大なスヴォーロフ将軍がそう言ったんです」と彼女は言ったのですが、実はこれは間違いだった。

すると司会者のほうが教養があったものですが、「いや、それを言ったのはグリボエドフのチャーツキイですね」と、誤りを指摘したんですね、その場ですぐに。そうしたらポクロンスカヤさんは、自分の間違いを素直に認めないで、「いや、スヴォーロフも言ったんです。つまり二人ともそう言ったんです」と答えた。

チャーツキイというのはグリボエドフという作家の戯曲『知恵の悲しみ』の主人公です。いまからほとんど二百年も前に書かれた古典ですが、いまでも文学的教養のあるロシア人ならば誰でも知っている名作で、チャーツキイはロシア近代文学を通じて受け継がれ、発展してきた「余計者」という国民的キャラクターの元祖として

知られています。ポクロンスカヤさんは、こともあろうに、そういう有名な作品の主人公の言葉を間違ってます。たくお間違いの、実在する歴史上の將軍の言葉だと言い張った。

皆さまは文学からの引用を間違えた程度のことです。どうした、と思われるかもしれませんが。そもそもチャーツキイとか、スヴォーロフ將軍と言われて日本人の多くには何のことやら見当もつかないでしょう。わかり易く例えて言えば、これは日本ならば、夏目漱石の『こころ』の先生の言った言葉を、乃木將軍の言った言葉だと言い張るようなものです。

ロシアでは、ポクロンスカヤさんのこの恥ずかしい間違いの後、インターネット上でも非難がごうごうと湧きおこって一種の「炎上」騒ぎになりました。こんな有名な言葉の出典を知らないのは国会議員には許しがたい無知無教養だ、というわけです。いまここでロシアの例を出すのははたして適当かと疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、文学的な教養がそれほど大事にされていて、文学の名文句を間違えて引用しただけでこれほど批判を浴びる国もあるということです。

それに対して日本では、最近はどうも、政治家の皆さんはそもそも文学をあまりお読みになっていないのではないのでしょうか。文学作品の引用どころの話ではなく、まず漢字が読めないという現象がかなり目立っています。個人攻撃をするつもりはありませんので、実名は出しませんが、知らない方も多いいと思いますので、「へえー、そんなことがあったのか!」とむしろ面白がっていたために(笑)、いくつか具体例を挙げますと、「云々」を「でんでん」と読んだり、「背後」を「せいご」、「画一的」を「がいちてき」と読んだり、可笑しなケースがいろいろ報道されています。世の中を率いていくべき立場の方がまず国語力を身につけるべきじゃないか、と思ってしまうですね。少なくともこういう方々は、国語教育に口を出さないほうがいいでしょう。

ただし、教養がないとか、漢字が読めないということを嫌味にここであげたらうつもりはありません。むしろ今の日本における本質的な問題は、漢字を知っていると、文学作品を読んでいるかとか、そういうことよりも、広い意味でのコミュニケーション能力の問題ではないか、と思います。

今の日本では政治家に限らず、企業や様々な組織の責任を負う立場の方々が、都合の悪いことを聞かれると、回答は「控えさせていただく」と言っ、平然と質問を無視する。「問題ではないか」と聞かれても、「適切に対処していません」の一言で答が終る。そんな風にコミュニケーションが遮断されて、コミュニケーションが成り立たない。そんなひどいことが横行しています。

それから、明らかに本当でないことを本当のように言い張って、それをみんなが事後的に受け入れる「真実」として通用させてしまう——これは世界的な現象で、「post-truth (ポスト・トゥルース)」と言いますけども、こういうことも、蔓延している。また、政治家の失言というのも非常に多く嘆かわしいのですが、失言を批判されると、必ず「誤解を与えたしたら申しわけありません」と言い訳をする。これは問題のすり替えですね。間違ったこと、よくないことを言ったから批判されているのに、「私は悪いこととは言っていないんですよ。それを誤解したのは皆さんです」といってごまかすから。ここでもまともなコミュニケーション



ションが成り立っていません。

そもそも失言というのは、根本的にはコミュニケーション能力の欠如のあらわれでしょう。本音をずばつといえむしろ一部では喝采されるということもあるんでしょう。しかし、自分の言ったことが相手に対してどのような影響を与えるか、相手にどんな思いをさせるかということを考えていない。コミュニケーションというのは、自分がいて、聞く相手がいて成り立つわけですから、相手のことを考えていないものを言っているというのは、もうコミュニケーションのプロセスを最初から無視していることになります。

このコミュニケーションの問題を念頭に置きながら、そろそろ教育や受験の話題につなきたいのですが、最近とりわけ英語教育の改革をめぐる議論の中で、コミュニケーションやその口頭での実践、つまり会話が重視されています。国語に関しても同様に、実用や論理国語などに焦点が当てられています。つまり広い意味で、社会的なコミュニケーションというものが大事だと言う方向になってきている。ここでは文学がその対極に置かれているようで、まあ、文学は実用的でもなければ論理的でもない、という根本的に誤った発想が根底にあるようです。

しかし、コミュニケーションと一言で言っても、人間の言語は非常に複雑です。コミュニケーションが成り立つ場には、様々な要素がかかわっていて、言語のいろいろな機能が使われています。例えばロマン・ヤコブソンという言語学者は、言語には六つの機能があるという風に整理しました。ごく手短かにご説明しますと、コミュニケーションが成り立つためには、まず発信者と受信者がいなければ話になりません。それから文脈 (context) が必要だし、メッセージも、接触 (contact) も必要になる。接触というのは分かりにくいかもしれませんが、電話をかけて「もしもし」というと、相手が「はい」と答える。これも接触なんです。人と会って話すことがない場合、「きょうは天気がいいですね」なんて天気の話で間を持たせるのも、一種の接触機能を使っていることになる。こういう場合は「あいさつ機能」と言い換えてもいいかもしれません。

こういう複雑な要素から成り立っているのがコミュニケーションですから、そのうちのどれか一つだけ——例えば情報伝達を正確にするというのは、その一面に過ぎないわけですが——取り上げて試験を作り人間の言語能力を評価するのは、根本的に間違っていると思います。コミュニケーションというのは、そんなに単純なものはありません。

さらに注意していただきたいのは、ロマン・ヤコブソンの図式が、じつは言語をコミュニケーションとして見た場合の六機能だということです。言語の持っている役割には、もっといろいろなものがあります。私は言語学者ではなく、文学研究に携わる立場からなのですが、ごく単純に考えても、言語の基本的な機能には、情報伝達の他にも、まず思考の機能があります。人間は言語がないものが考えられません。それからさらに、美的機能、あるいは詩的機能というものもある。つまり言葉によって美的な芸術作品をつくっていく機能ですね。

この三つは言語の基本的な機能として、どれも非常に重要なものです。ここで思考についてのみ、一言補足しますと、与えられた情報がそのままインプットされて、それを一〇〇%受け入れるだけでは思考になりません。思考というのは、与えられた情報に対して、それが正しいのか、そこにどんな問題があるのかということ、自分の頭で考える能力を必ず含みます。ですから思考は、批判的思考であるということに必然的になります。

いま進められようとしている大学入試の国語試験の改革で、実用的な文章を出すということに関する一番の問題は、契約書とか校則などが既成事実として提示されて、その校則なり契約書が正しいという前提で受け止め、それをどの程度正しく理解したか試す試験になってしまおうということです。しかしこの世の中の現実を見ると、そもそも契約書の書き方が正しいとは限らない。校則が全部正しいとは限りません。世の中にあふれているこの種の文章は、日本語からして変なものが多い。

そもそも言葉を使いこなすのはそう簡単ではありません。役所の文書や法律さえも悪文が多い。そういった言葉を使うに当たっては、特に芸術表現にかかわる人たちは、古今東西、時代と国を越えて、実は同じ

ようなことに悩んできた。ここでちよつと唐突ですが、『古今和歌集』の仮名序にある、紀貫之の非常に有名な言葉を見てみましょう。「在原業平は、その心あまりて、ことばたらず。しほめる花のいろなくして、にほひのこれるがごとし」。言いたいことはいっぱいある。内容はいっぱいある。心はいっぱいあるけど、それをうまく作品として表現する、形にするための言葉が足りないということです。

つまりこれは、言語芸術作品、言語表現における形式と内容の問題です。これは普遍的な問題で、そのほとんど千年後にフランスでドガとマラルメが会話の際にも同じようなことを繰り返しているんですね。ドガは画家ですが、自分も詩を書いてみたいと思う。でも考え、観念、イデーというものはたくさんあるのに、どうもうまく詩にならない、と自分の悩みを詩人のマラルメに打ち明けると、マラルメは「親愛なるドガ君、詩は観念ではなく、言葉でつくるものです」と答えています。

千年の時空を超えて、マラルメと紀貫之の言っていることの間には驚くべき一致が見られます。つまり詩における内容と形式、これを調和させるのがいかに難しいかということ、人間はいかによい言語表現ができるかについて悩みながら今まで言葉を使ってきたということです。

最後に今日申し上げたことをまとめますと、言葉というのは、こういうふうには豊かで複雑なものです。コミュニケーション一つを取っても、非常に奥が深い。それに対する畏敬の念というものが失われているのではないか。自分のわからない、難しい言葉を使う人がいると、昔は自分に教養がないなどと思って反省したものだと思いますが、今は逆にばかりにするんですね。人から聞いた話ですが、あるテレビ番組で「枚挙にいとまがない」という言葉を誰かが使ったら、別のタレントが「何その変な言葉。聞いたことないよ」ってあざ笑ったそうです。そうしたらその場にいた他の人たちも皆同調して笑った、とか。そういう時勢になってきてしまいました。コミュニケーション、論理、実用などと言う前に、そもそもその根本にある言葉というものの豊かさ、複雑さというものを考えなければいけないと思います。

ということ、以上です。

安藤 宏教授：どうもありがとうございます。文科省が今回の改革で強調しているのは、話す・聞く・書く、この三つの能力をバランスよく身につけなければいけない、話す、聞く能力が不足しがちであるということなんですけれども、ではそれを決めている人たちが、政治家を含めて、本当に話す・聞く能力があるんだろうかということ、ちよつとなかなか皮肉のきいたお話でありました。

それから、本来、お互い見えない中で言葉で模索し合っていく、そこから多分言葉に対する畏敬の念というのが出てくると思うんですけども、そうではなくて、何か非常に表面的に都合のいい部分だけを取り出して、予定調和的な契約書の話も出てきましたけれども、コミュニケーションというものがそういう方向に行ってしまうのではないかと、そういう恐ろしさのようなものについて触れておられたように思います。

それでは納富さん、お願いいたします。



納富 信留教授：次に報告させていただきます。私の専門は哲学で、特に西洋の古代哲学を研究しておりますので、

きょうの中心テーマである国語科や入試といった問題には少し距離がありますが、同じ文学部に属する仲間として、少し距離を置きながら一緒に考えたいと思います。言葉はもちろん哲学の問題ですので、そこから話させていただきます。

きょうは「ことばの危機」がシンポジウムのテーマになっていますが、これは、最初に安藤さんからご報告があったように、今直面している教育制度の改革、特に入試を中心とする改革と授業の科目編成の問題に関するものです。哲学は基本的に社会科学教育、教員免状も社会科学なので、私に関わる教科は倫理や、今度新設される公共になります。

ということ、他教科については正直あまり存じ上げなかったのですが、この機会に、国語でいろいろな問題がおこっている、また、阿部さんの英語でも特に入試の関係で大きな問題が発生しているということを知りました。社会科もそれなりに難しい状況ですが、国語と英語のほうが大変かなという印象を受けています。現状を勉強させてもらい、どういことが起こっているのかを見守っています。

国語科の改革と英語科の改革。その事情については私より詳しい方々も多いはずですが、そのどこに一番本質的な問題があるのかが私の一番の関心事です。これらは必ずしも個々別々に起こっていることではなく、多分連動して起こっており、恐らく社会科やほかの科目もある程度連動していると思います。しかも、これは日本だけの問題でなく、ほかの国々でも似たような問題が起こっているということを聞いています。その中で、果たしてどこに問題があるのか、哲学から考えます。

私の最初のテーゼを申し上げます。少し大きなところからお話しさせていただきますが、この問題の根源は、「言葉をツールだと思っている」ところにあるのではないか、これが私の基本的な主張です。つまり、言葉の捉え方が根本的に間違っているのではないかと考えています。少し説明しなければいけませんね。こう言われると、まあ、普通そう思っているのではないですか、と答える人が多いと思います。日本語、英語、私が読む古典ギリシャ語などいろいろな言語がありますが、基本的には、語学を学ぶのは何かに使うため、つまりツールだと考えています。日常のコミュニケーションを含めて、仕事に役立てるとか、海外旅行をしたときに料理をオーダーするとか、そういうことです。私たちは通常、言葉というのは、一種のツールだと思っているはずですが。

私も、ツールという面がないと全否定するわけではありませんが、言葉をツールだと思うことによって、非常に大きな間違いがいろいろと生じているのではないかと考えています。これがまずもつとも大切な点です。どのような問題になるかという、ツールだったら、どちらの言葉のほうが良いか、といった議論になってしまふ。ツールとしてどちらを使うのが便利か、効率がよいか、という視点に縛られます。穴を掘るときにスコップのほ

うがよいか、シャベルがよいか、とか。切るときにナイフがよいか、ハサミがよいかという、そういう話になるのですね。

そうすると、国語科の、きょう話題になつていような、文学国語か論理国語か、といった訳のわからない選択になるわけです。つまり、何かのためのツールだったら、より有効なほうがいい、より役に立つほうがいい。つまり、より効果的に使えるほうが良いという発想になります。さらに、ツールである以上は、当然効果をねらうことになります。何かの目的のために使うわけですから、その場合には、例えば、理解力とか、読解力も含めて、そのための手段として効果が測定されます。「何とか力(りよく)」という言葉は文科省は大好きなようですが、力というのは、この場合、その人が持っている本当の善さというよりは、何かをするための道具とみなされています。ですから持っていたほうがよい、身につけるべきだという論理になります。仕事についたときに、読解力がなかったらそもそも契約書を読めないでしょう、といった発想です。そのような発想は、基本的にはツールとして、効率だけで言葉を取り扱っているのではないのでしょうか。労働力、結局は労働力ですね、そこで目指されているのは、産業界の方から、大学で、あるいは高校などで教育をしてくれと求めているのは、基本的に、一番効率よく、一番仕事がたくさんできる人材をつくってほしいということにつきます。つまり、言葉は道具扱いされている。それによって、私たち人間も道具扱われています。

道具である以上、ツールである以上、簡単な方が都合が良いのです。一番手間がかからず、一番多くの人を使える共通のツールを手に入れる、それが社会的にはもつとも効率が良いわけですよ。効率という観点かややはり入ってきます。ツールであっても、もちろん、おもしろい道具を、複雑だけど使いたいといった、そういう趣味の人もいるかもしれません。しかし、通常ツールというものは、何かの目的との費用対効果ではかられますので、コミュニケーションのツールだと見なされれば、まあできるだけ簡単なものがいいよねと、思われてしまいます。さらに言えば、英語だけしゃべれば、世界中で簡単に使えると信じていますよね。わざわざ難しい言語を学ぶ

必要はありません、となります。あるいは情報だけが欲しい。一歩進めれば、英語ですら必要がなくなり、情報ツールだけが使えれば良いという話になるのです。

こういった発想は人文学的には危機となります。言葉をツールとして扱うと、沼野先生のロシア語とか、大西先生の中国語とかは、使い勝手が悪い、と言うと失礼ですけども、使っている人が限定されるので学ばなくてもよいという話になっていきます。さらに言えば、英語だけ学べば十分だと安易に考えてしまいます。英語なら安泰だと思つて、英語の先生になろうと思つたら大間違いですよ。これから自動翻訳機が格段に進歩していきますからね。自動翻訳機が普及したら、ツールとしての英語は機械に任せればよいので、英語の先生はゼロでもよくなります。つまり語学が必要なくなってしまうのです。

これはやはり、どこか本末転倒なのではないでしょうか。つまり言葉がツールだとしたら、今言つたように、基本的には一番単純で効率的なものが良いので、自動的に目的を果たしてくれれば必要がなくなる、つまり、言葉そのものがなくなってしまうからです。ここで恐らく最大の問題は、人権や民主主義や自由といった、私たちが尊重してきた価値の非常に大きな部分が損なわれる危険があることです。これが人文の危機という意味です。

さらに言うと、人間が人間でなくなってしまう。つまり、私たちは、なにか大きなマシンの一部になってしまふのです。昔から使われる比喩ですが、機械の歯車の一部のように、私たちもツール化されてしまいます。

このように、どのツールを使えば効率が良いか。どのツールを教えれば良いのかという発想で教育を進めると、自分自身がどんどんツールになっていってしまうという、その点が第一の問題だと考えています。

では、本来言葉をどのように捉えるべきかと言うと、皆さんは驚かれるかもしれませんが、「言葉は私自身の存在だ」というのが私の、哲学からの主張です。主張というか、一種の問題提起です。

言葉が私自身だというのは変だ、そう思うかもしれませんが、しかし、私が専門としている古代哲学、プラトン

からそういう考え方があります。言葉とは、それを使って何かをするためのものではなくて、むしろ私自身であり、私が世界をつくっているのは言葉なのだという考えです。

簡単に言うと、私たちは、言葉で生きています。例えば、「立派な人間になる」とか、「正しい人間、優しい人になる」とか言う場合、この「優しい」や「立派」や「正しい」という言葉を通じて私たちは自己形成しているわけです。言葉を離れて、優しいということの実体がどこかにあるのではなくて、むしろ優しさや人のことを思うこと、ここでも「人」や「思う」ということは全て言葉で成り立っています。私たちは言葉で行動して、私自身のあり方をつくっているのです。

それは決して、先ほど言つたようなツール、つまり代替可能なものとして言葉を使っているのではなく、むしろ言葉が私自身のあり方をつくっている、世界もそうやってできているという意味です。世界と言うとやたらと大きなことを言うと思うかもしれませんが、全てのあり方が、言葉によつて、つまり、教育も人を育てることも、そういった全てが言葉によつてできています。その場面から、もう一度考えなければならぬと思います。



当然ですけれども、社会、つまり人と人との間は言葉で成り立っています。もちろん身振りもあれば、ボディコンタクトもありますけれども、基本的にやはり言葉と言葉で私たちは一緒に生きています。文化のあり方もそうで、文化はほとんど言葉そのものですね。特に歴史、長い時間を超えて何かを受け継ぐことは、言葉を通じた営みであり、私たちが大学で読んでいるような古い文献は、基本的に言葉で残されています。つまり、文化や伝統は書き残されてきた言葉です。それを、時間を超えて読み解いていくことで、現代を超えるような視野が手に入ると信じています。教育とはそういうものですよ。先ほど言ったように、人のあり方そのものが言葉なので、すから、言葉によって人をつくることになるわけです。

それにもう一つ、先ほど出てきましたが、美というのも実は言葉でできています。美がなにかそのままある、言葉を離れて美という存在があるのではなくて、私たちはこれを美しいとか、きれいだとか、さまざまにニュアンスに満ちた言葉で表現することによって、私たちは美という存在に出会っているのです。つまり、美を創造しているのは言葉なのです。

言葉にはもう一つ重要な面があります。これも現代ではあまり強調されませんが、言葉とは、超越という哲学の契機です。つまり、私たちが生きていくこの場を超えるのは言葉なのです。たとえば、きょうのお昼カレーライスを食べたとか、夜は何を食べようかと、そういう日常の次元ではなくて、何千年後、何万年後、あるいは時間そのものを超えるような、そんなあり方に思いを致すのが言葉です。私がもう死んでいるような世界、あるいは私たちが生まれる前、ビッグバン以前の世界までを私たちは考えたり、そこに思いを馳せたりすることができるのです。そういうことを哲学では「超越」という言葉で論じますが、何か私たちを超えたものとかかわる次元、そこへと開かれる、これは一種の通路みたいな感じですね、私たちを超えさせるものが言葉です。それは、文学で言ったら詩です。詩の韻律というものは、基本的に神の言葉を伝えるものだと古代人は信じていました。そうすると、祈りですね。祈りの言葉。そして呼びかけ。西洋でもそうですけども、恐らく東洋でも、それぞれ

の文化においてそういう原初の言葉が文学の形態になってきたのだと思います。

以上のような見方を背景にして、あと二つ論点をつけ加えていきます。一つは、今国語科の改革で問題になっている「論理」というものに、私は結構違和感を感じています。ご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、これから国語科で科目の名前が変わり、選択と必修の割合が動くようですが、その中で、論理国語と文学国語という名前が出ていて、選択必修になると聞いています。ですが、それは非常に変な呼び名ではないかと思つています。

論理国語という言い方に非常に違和感があるのですが、何をもって論理と言っているのかが分かりません。仄聞した限りでは、あまりきちんと定義されていないように感じました。論理と聞くと、何か役に立ちそうだとか、論理的でないよりは論理的なほうが良いと思いがちですけれども、そもそも論理、ロジックというのは「言葉の技術」という意味なので、言葉である以上全て論理です。ある意味ではですが。

いろいろな種類の論理がありますが、それをきちんと身につけるといえるのは、すべての基本です。別に論理という言葉を使わなくても、小説であろうが詩であろうが、その意味では、言葉をきちんと理解して使っていくことは、広い意味ではすべて論理です。先ほどの解説では、ニュアンスだとか、コミュニケーションだとか、そういうのも全部、広い意味での論理に入ります。

狭い意味での論理は何かというと、今度は、これは哲学が扱う論理学になります。論理学の授業を取ると、必ず数式がたくさん出てくるのに驚くはずですよ。特に形式論理学と呼ばれる分野ですが、通常論理学として教えられている部分で、数学に近いものです。形式論理を使うと、私たちは頭の中では混乱して明瞭になっていない事柄が、非常に高度な形で証明されるのです。不完全性定理の証明などの、途轍もない思考も可能になります。ですが、そのような論理学が私たちの日常言語からかなりかけ離れているという認識が、まずは必要です。

つまり論理学というものは、とても大事ではありますが、どちらかというと数学に近くて、私たちが日常で話

したり考えたりする言葉とは、それほど直接には関わらないものです。小さな例を二〜三挙げてみましょう。最初の例は、論理学の記号でV、論理和という例です。論理和で「大西研究科長は立派、または、学識深い」と聞くと、皆さんどう理解しますか。普通「または」と言うと、どちらか片方だけという意味にとるのではないでしょうか。ですが、論理学の「または」は、AかBかの片方、もしくはAとBの両方を含むものなので、日本語の「または」とは意味が違います。次の例では、「1足す3イコール4ならば、日本の首都は東京である」という命題を出しました。これも「ならば」と付いているので、「1足す3イコール4」と「日本の首都は東京」との間に関係があるかという点、内容的な関係は全くありません。関係なくともいいのです。論理学というのは形式的なものなので、形式だけ合っていれば、中身は考えなくても、自動的に真と偽は決まるといのが形式論理の基本です。

三番目の例はさらに極端で、「丸い三角形が存在すれば、狐は化ける」も「狐は化けない」も真です。つまり条件文の前提が偽であれば、後件が何を言っても全体は真になるという例です。論理学では最初に学ぶ規則のようなものですね。

これらの例を見ると分かるのですが、論理学は、別に実用のためであってそれを勉強すれば何か日常生活が豊かになる、得をするといったものではなくて、論理学を学ぶと、時に思考の混乱が避けられることもあるかも、というぐらいのことです。役に立った例がないとは言いません。確かに混乱した議論を整理するのに役に立つこともありますが、正直言って、思っているほど多くはないのですよ、そういう例は。つまり、狭い論理学で解決できる部分もあるけれども、日常言語は論理学では解決できない部分の方がたくさんある、そんな関係だと思います。

先ほどから既に二人の先生からお話がありました。私たちが使っている言葉というものは、規則できれいに縛られるような部分で尽くされることはありません。曖昧さ、ニュアンス、綾といったものに満ち満ちているのが言葉です。ここで論理とどう折り合いをつけていくのかというところを考えないで、論理的な思考を勉強するために、論理的な日本語を読めば、論理的になるといいます。そんなことを言っている、ほとんど意味がない、非論理的なことではないかと思えます。論理学の立場から言ってしまうと、そうだと思います。

では、論理学は何のために学ぶのかと言うと、それは知性を涵養するためです。私たち人間は知的能力を培わなければならない。これは数学と同じです。なぜ小学校、中学校、高校で算数や数学を学ばされるかというと、計算するだけでしたら計算機を使えば済むわけですよ。なぜ三角関数など学ばなければならないかというと、それらを通じて人間としての知的能力を訓練し、さまざま場面で知的な思考や判断ができるようになる、そういった「人間になる」ための訓練をする教育プログラムだからです。論理学というものは、私は基本的にそのようなものだと考えているので、論理を学べば会社で立派に仕事ができるのか、社会できちんと議論ができるのか、そんなことはないと思います。

もう少し格好よく言うと、数学や論理とは、むしろ美的な感覚を養うための訓練です。私はそう考えています。最後にもう一点、文科省のさまざまな改革の中で私が気になっているのは、「対話力」という言葉がなぜか最近流行っていることです。キャッチーな言葉をつくって流通させるのは見かけの改革の常ですが、これはほとんど意味不明な言葉なので、何とかしてほしいと思っています。と言いますのは、私の研究しているプラトン哲学は、対話、つまり、ディアロゴスを基本とするからです。プラトンの著作はすべて対話篇で書かれています。それが、それは、対話で哲学を行うという基本があり、逆に言えば、哲学はまさに対話だと考えられていました。

では、対話とは何かと聞かれたら、これは大変な哲学的問題なのですが、この言葉はそんなに簡単には使えません。アクティブラーニングとは、主体的、対話的で、深い学び、ですか(笑)。何が深いのか、さっぱりわかりません。アクティビティと書いてありますね。これは一体何のことか、きちんと考えて書いてほしいです。対話とは何かということを考えて言ってほしいです。私は、もちろん対話を否定しているわけではありません。

対話は大事だ、途方もなく大切だと思えますので、だからこそ、対話とは本当は何なのかをきちんと考えなくてはならないのです。その一方で今の日本では、先ほど沼野さんがおっしゃったように、基本的には対話を拒絶するような場面が多いわけですよ。

それに対して、対話をきちんと行っていくには、どう考えたら良いのでしょうか。私自身は、哲学としてそういう課題を立てています。

「対話」という言葉自体、もう少しきちんと考えても良いのではないのでしょうか。この言葉はどうやら、江戸時代に中国の白話文学から入ってきて使われ始めたと言明されており、明治に欧米語から入ってきたダイアログ (dialogue) の訳語となりました。対話の「対」という字では、例えば「対決」という熟語がありますね。対決というところと怖いかもしれません、人と人とが一緒に議論をするということは、ある意味ではぶつかり合いです。これを恐れて対話はできません。最初から人とぶつかる気がなかったら、一緒にコミュニケーションはできないということですよ。

「対等」という熟語もあります。ここでは「等しい」という漢字がついていますが、これもおもしろいところですよ。二人の人がしゃべる場合に、一方が全部を語って、片方は聞くだけだったら、対話にならないですよ。文科省のアクティブラーニングという説明では、小学校で教師と生徒が対話するといったことが想定されているようで、私は言葉の使い方がおかしいのではないかなと思ってしまいます。もちろん教師も小学生の言うことを聞くべきだと思いますが、いや、本当にそういう気があるのなら結構ですけど、相手の言葉を対等に聞く気がないのに、もし形式的に対話っぽいやりとりを強制したら、それは子供たちに言葉に対する嫌悪と絶望しかもたらしません。さらに言えば、小学生や中学生が、先生の言おうとしていることを忖度して、それを答えて対話のふりをするという、そういう賢い術を身につけるということにつながるわけですね。つまり、対話とは正反対のことが起こってしまうのではないかと、危惧しています。

また、「対応」という熟語も見ましょう。「対」という漢字がついた言葉をたくさん並べているのですが、対応とは人がお互いに応じ合うという、良い意味があります。それで言えば、聞く、聞かれるということをしきりと成り立たせるところが、対話の基本になるのではないのでしょうか。

次は「対面」。ここにはもう一つ大きな問題があります。対面というものは、顔と顔が向き合ったときに始まるという意味です。もちろん、いつもそういう状況ではなくても、例えば電話とかでもあり得るでしょうが、やはり人と人との対話は、基本的に、顔と顔が、目と目が向き合っているものです。そう考えると、最近いろんなツールが普及して、むしろ向き合わなくなっているようです。隣に座っていても、文字を打ち込んで電波で会話しているということが時々あるようですが……対話以前の問題として、言葉というものがどう成り立つのかということに、根本的な反省が必要なのではないでしょうか。

またプラトンの哲学で恐縮ですが、対話とは言葉を交わすことであり、言葉は魂と魂の間で交わされるものだと考えています。私たちは肉体で、喉で、この部位で音声をつくって、物理的に音波を発しているように思うかもしれませんが、それはまったく違います。私という魂が、これを聞いていらっしやる皆さんの魂に直接投げかけ、それを受け取ってもらっているのが言葉というものなのです。それが言葉というものの意味であり、言葉の精神とでも言うべきものです。それを抜きに、音声、つまり、空気振動の波長でこういうものを耳で受信しているということではありません。言葉を聞くとは、そういう肉体や物体の問題ではなく、魂のやりとりなのです。

そうだとすると、言葉というのは、先ほど申しましたように、私自身、あるいはあなた自身が存在するというその場を開いていることになります。私たち人間は一人では生きられませんから、私も、皆さんも、一緒に言葉を発し、対話することによって一緒に生きていく、その場を開くというのが、言葉の本質ではないかと考えています。

このように哲学で根本まで考えていくと、国語教育の現場までなかなか戻れないのですが(笑)。ただ、一番

根本的な問題は、最初に指摘させていただいたように、何かこういう基本を忘れてしまったところで、どんな文章を教材にすべきかとか、論理と文学のどちらが大切かなどと言っても、結局同じ土俵の上で踊っているだけで、人文学の本当の良さを発揮できないのではないかなというのが、私のきょうの一応の結論です。少し時間が長くなりませんが、以上です。

安藤 宏教授：納富さん、どうもありがとうございます。何か月前だったか、たまたま納富さんとちよつと立ち話をしていたときに、今度高校の現代文が「論理国語」と「文学国語」の二つに分かれてしまうんだと。「論理国語」は論理と実用を重視して、「文学」国語は文学をやるんだと。そういう分類なんですよと申し上げたときに、納富さんが不思議そうな顔をされて、「うーん、論理って実用と全くなじまないし、私たちがやっている論理って、まず日常の役に立たないんですけれどもねえ」と首をひねっておられたのが印象的で、きょうのお話して、とてもそのあたりのことがよくわかりました。言葉は魂と魂のぶつかり合いなのだというのは、大変深く心に入ってくる言葉でした。

それでは最後に大西さん、お願いいたします。

大西 克也教授：大西です。私、きょうここにいる五人のメンバーの中で、専門が古代中国の言葉とか、漢字とか、出土資料とか、そういったものを研究しているものですから、唯一恐らく国語の漢文とかかわりを持っている人間だと思います。そういう立場から、きょうは、漢文を一つの題材としてお話をさせていただきたいと思つてます。

さつき古代中国の言葉と言いましたけれども、文法というと、何かその、古典嫌いか漢文嫌いか、そういうものを助長するようなイメージで捉える方もいらっしゃると思うのですが、本当の文法というのは、本来は古典の読み方というものを豊かにし、深くするものだと思つています。私がやっている古代中国語の文法、簡単に言うと漢文の文法ですけれども、私にとつてみれば、驚きと発見に満ちている、非常にエキサイティングな分野だと思つています。きょうは、古代中国語の文章、漢文を通じて、今回のテーマ「ことばの危機」を考えたいと思つています。今回お話をさせていただくに当たって、指導要領の改訂に関する幾つかの文章、著作なんかを読ませていただきました。私、こういう方面はあまり詳しくないのですが、そういった経験を通じて、教育の現場にも賛否両論あることは存じています。きょうお話しすることは、古代の言葉と向き合うことを職業としてやってきた人間の問題意識の一つとして聞いていただけたらと思います。



前置きとして、ちよつと長くなるのですが、私にとつて、古代の文章を読むということがどういふことかというところからお話しさせていただきたいと思つています。我々は会話をするときには、絶えず、相手がその話題に対してどんな知識を持っているかとか、どんな感情を持っているかとか、そういったことを推しはかりながら話をして、それによって表現を変えていると思うんですね。そのことを固有名詞を例にして説明したいと思つています。

例えば、きょうの司会者の安藤さんが、きのうテレビ番組に出演して、とてもおもしろいことを言っていたと言つたとして、これ全然自然ですよ。不自然なところはありますか。と

言つたとして、これを初対面の人に言つたらどうなるか。見ず知らずの人にいきなり安藤さんとか言つたら、相手はきょとんとしてしまうと思うんです。固有名詞をいきなり使つて自然な会話が成立するというのは、話し手と聞き手の間に、その固有名詞に対する共通の知識というものが共有されていることが前提になります。で、私も、

阿部さんも、安藤さんも文学部の同僚ですから、いきなり固有名詞を言ってもすんなりと話題に入っていける。しかし、初対面の人には、そんなことでは対話が成立しませんから、何らかの配慮が必要になってくる。例えば、「きのうテレビで東大の国文の安藤さんという人がこんなことを言っていましたよ」と、これをつけるだけでもかなり印象が変わってくると思うんですね。

「東大の国文の」というのは、相手が必ずしも知らない安藤さんに対する一つの説明になりますし、もっと大事なのは、この「何々という人」という表現なんですね。これは、安藤さんという人を、誰でも知っている人としてではなくて、相手が初めて耳にする人として導入する、そういう働きをする言葉です。つまり、「何々という人」には、人間の個性を奪って、「安藤さん」という名札をぶら下げている、とある人として導入する。そういう働きがあるんです。

同様のことは、漢文の中にもあります。ここでパワーポイントの中に、論語の一節を引用しておきました。訓読も一緒に挙げておきましたので、そこを読みますと、「哀公問フ、弟子孰力学ヲ好ムト為ス。孔子対ヘテ曰ク、顔回ナル者有リテ、学ヲ好ム」というふうに言っているんですね。つまり、君主から、「あなたの弟子の中で誰が学問好きですか」と聞かれて、孔子が、「顔回ナル者有リテ」と答えます。これを訳すと「顔回という人がおりました」ということになります。

まさにこれ、「安藤さんという人」と同じなんですね。漢文では、ここにある「者（しゃ）」という言葉、それから前にある「有（ゆう）」という言葉、これを使うことによって、先ほど言った名札化の働きをさせているわけです。

なぜこの「有（ゆう）」とか「者（しゃ）」に名札化の働きがあるのかということは、授業だったら説明するところですけど、それ言い始めるともうそれだけでかなり時間をとりますので、ここでは省略させていただきますが、大事なのは、孔子が、弟子の顔回になぜこういうような表現をつけて言葉をしたか、なんですね。

孔子にとってみれば、この顔回という人は、非常によく知っている、一番弟子と言える人ですけども、君主の哀公が、彼のことを知っているとは限らないわけですね。そこで「者（しゃ）」という言葉をつけて、あなたにとつて初めて耳にする人ですよというマーケティングをしているわけです。

それだけではなくて、固有名詞を裸で使うということは、その固有名詞に対して、相手が知識を持っているということを前提にしているわけです。さらに言うと、聞き手に対して、知識の共有を強要していることになりま。それでは君主に対しては非常に失礼な表現になるわけですね。だから、相手の君主が顔回を知っているかどうかというのは、ここでは本質ではなくて、知識の強要を避けるということで、君主に対して失礼のない表現をした。そこがより重要なポイントになるわけです。

これを言語学では、対人配慮であるとか、ポライトネスとかというような用語を使っていますけども、『論語』という書物を読んでみると、この孔子という人が、言葉遣いの上でポライトネスに非常に敏感な人であったということがよくわかります。皆さんも固有名詞とか、聞きなれない言葉、そういったものを裸で振り回すような人に対してはちょっと注意したほうがいいと思いますね（笑）。そういう人は、自分の知識を相手に共有することを求めている。強要している。言葉遣いの上でポライトネスに対して、非常に鈍感な人だと思います。あまりお友達つき合いはしないほうがいいでしょう（笑）。

冒頭で、私たちは絶えず相手の知識とか、感情を推しはかりながら表現を変えているというふうに申しました。人の心を推しはかること、これを漢語では「忖度」といいます。先ほど納富先生も使っておられましたけれども、忖度するということは、言語と人間の本質と非常に深く結びついていると私は思っています。よくA Iは言葉が苦手だとかいうことが言われますけれども、それはやはりA Iは人の心を忖度できない。そこに非常に大きな原因があるように、私は思っています。

ちよつと脇道にそれますが、忖度という言葉は、中国で最も古い詩集である『詩経』の大雅の「巧言」

という詩に出てくるんですね。そこでは、「他人二心有り、予（われ）之ヲ付度ス」というふうに出てきましたね。古い注釈の中では、高い徳を備えた聖人君子が、よからぬ人の心を見通して、悪巧みを見破る、そんな文脈で使われているんだという解釈が行われているわけですね。それが近年、それとは全く逆の意味で多用されるようになったというのは、私は非常に残念なことだと思っています。人間とその言葉の本質を象徴する「付度」という言葉が汚されてしまった。これはやはり、日本における「ことばの危機」の一種の象徴みたいな現象ではないかと思っています。

我々は古代の文章を読みますけれども、古い人の心というのは、幾ら付度してもわからない。それが正しいかどうか判断のしようがありません。そこに古い文献を読む一番の難しさがあると思っています。

言葉の世界では、我々、同じ世界に生きている人間であれば、同じ言葉を使っていれば、時にすき間が生じることがあっても、相手も、私も、大体同じような主観でその対象を見ている。そのような主観性が、互いに共有されていると思うんですね。それが、会話が成立するということで、実感としても感じるができると思う。

しかし、古代の人との間では、こんなことを確かめようがないんですね。しかしそれでも、我々は、自分たちの言葉とか、古い言葉や文化に対する知識と、それから言葉の使い手としての古代人と我々の共通性というものを手がかかりとして付度し続けるしかない。つまり、私たちの言葉と古代人の言葉の間には、言語としてのつながりとともに深い断絶がある。それが古代の古い文献を読むときに意識しておかないといけない非常に重要なポイントだと思っています。

もちろん断絶だけではなくて、つながりもあるわけです。我々が二千年も前の古い中国語、漢文の言葉を、不十分ながらも理解できるというのは、やはり言葉自体のつながり、あるいはその言葉を操る人間としてのつながりがあるからですね。先ほど言った「者（しゃ）」という言葉にポライトネスマーカ―の機能があるということがわかるのも、やはり言語の使い手としての共通性があるからわかる。私たちはたかだか一〇〇、あるいは二〇〇ぐらいの例文を集めてきただけで、あつというような発見をすることがあります。それはやはり、言葉の使い手としての、人間としての共通性があることが大きな力を発揮しているわけです。

こういうつながりと断絶を意識することが非常に大事なんですけれども、最近の教育改革・入試改革には、そのあたりの意識、特に断絶に対する意識というものが希薄になってきているように、私には感じられます。ここでちょっと、二〇一七年に行われたプレテストの漢文の問題を題材に取り上げたいんです。これを見て感じたのは、いわゆる複合問題への違和感です。これは複数の素材を組み合わせて回答させるもので、いわば教育改革・入試改革の目玉のようになっていくように感じられるのですけれども、問題を見る限り、とても有効に機能しているように思われません。

ちょっと問題を見ますが、お手元の資料を見ていただいたほうがわかりやすいかと思います。素材は、一つ目は『史記』。太公望呂尚と、それから西伯という名で出てきますけれども、後の周の文王の出会いは場面ですね。さらに二つ目の文章がつけ加えられていて、それは、この場面を題材に取った江戸時代の漢詩人・儒学者である佐藤一斎の漢詩なんです。

この出会いの部分を読みますと（資料1）、「呂尚ハ蓋シ嘗テ窮困シ、年老イタリ。漁釣ヲ以テ周ノ西伯に好ム」と、こういう出だしになっております。呂尚は年をとって非常に困窮していた。そこで西伯が狩猟に来ることを聞きつけて、釣りを利用して仕官しようと画策するわけですね。そしたらその計略が功を奏して、文王は、釣りをしていた呂尚と出会って意気投合して、「あなたこそが、亡き父君が待ち望んでいた聖人ではないか」と言われて帰るんですね。漢文の原文の後ろから二行目のところですけども、『…子ハ真ニ是レナルカ。吾ガ太公子ヲ望ムコト久シ』ト」と、こういうふうになっているわけです。その後でその呂尚は、周が殷を滅ぼす立役者となったわけです。

佐藤一斎の漢詩というのは、このエピソードに基づいて、ちょっとひねりを加えているんですね（資料2）。

第5問 次の【文章Ⅰ】は、殷王朝の末期に、周の西伯が呂尚（太公望）と出会った時の話を記したものである。授業でこれを読んだC組は太公望について調べてみるようになった。二班は、太公望のことを詠んだ佐藤一斎の漢詩を見つけ、調べたことを【文章Ⅱ】としてまとめた。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。なお、返り点・送り仮名を省いたところがある。

【文章Ⅰ】

呂尚蓋嘗窮困、年老矣。以漁釣^(注1)于西伯。西伯將出獵、
 卜之。曰：「所獲非龍、非虎、非羆、所獲霸王之輔。」於是周
 西伯獵。果遇^(注2)太公於渭之陽。与語大說。曰：「自吾先君太公
 曰：『當有^(注3)聖人適^(注4)周。』」周以興。子真是邪。吾太公望子久矣。故
 号之曰太公望。載与俱。婦立為師。

（司馬遷『史記』による。）

（注） 1 奸——知遇を得ることを求める。

2 太公——ここでは呂尚を指す。

3 渭之陽——渭水の北岸。渭水は、今の陝西省を東に流れて黄河に至る川。

4 吾先君太公——ここでは西伯の亡父を指す（なお諸説がある）。

【文章Ⅱ】

佐藤一斎の「太公垂釣の図」について

平成二十九年十一月十三日

愛日楼高等学校二年C組二班

太公垂釣、図

佐藤一斎

謬^{あやま}被^レ文王載^セ得^テ帰^リ一竿^{いっかん}風月与^レ心違^{たが}。
 想^{おも}君^み牧野鷹揚^{ぼくやよう}後^{のち}。
 夢^{ゆめ}在^ハ磻溪^{はんけい}旧釣磯^{きゅうてういそ}。

本意にも文王によって周に連れていかれてしまい、
 釣り竿一本だけの風月という願いとは、異なることになってしまった。

想うに、あなたは牧野で武勇知略を示して殷を討伐した後は、
 磻溪の昔の釣磯を毎夜夢に見ていたことであろう。



狩野探幽画「太公望釣磻溪」

日本でも太公望が釣りをする絵画がたくさん描かれました。

幕末の佐藤一斎（二七二〜一八五九）に、太公望（呂尚）のことを詠んだ漢詩があります。太公望は、七十歳を過ぎてから磻溪（渭水のほとり）で文王（西伯）と出会い、周に任せます。殷との「牧野の戦い」では、軍師として活躍し、周の天下を盤石のものとしました。しかし、その本当の思いは？

C 佐藤一斎の漢詩は、【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を描きました。

ある説として、この漢詩は佐藤一斎が七十歳を過ぎてから昌平坂学問所（幕府直轄の学校）の教官となり、その時の自分の心境を示しているとも言われています。

〈コラム〉

太公望Ⅱ釣り人？
 文王との出会いが釣りであったことから、今では釣り人のことを「太公望」と言います。
 【文章Ⅰ】の、西伯が望んだ人物だったからという由来とは違う意味で使われています。

問題文のほうでも、「【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を描きました」と言っています。それはそのとおりなんですけども、その直前の「しかし、その本当の思いは？」というの、これは余計な一言で、受験生を混乱させるのではないかと心配になります。この「本当の思い」というのは、実は本心ではないので、本当は括弧書きにでもしておけばよかったですのではないかと思うんです。

さらに設問もその後の一つ挙げておきました(資料3)。全部で七つ設問があるんですけども、その中で、この二つの文章にかかわってくるのが問7の一つだけなんです。ね。問7では、「∴【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を描きました」とあるが、佐藤一斎の漢詩からうかがえる太公望の説明として適切なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ」と書いてあって、これ実は【文章Ⅰ】を読まなくても解けます。佐藤一斎の詩だけで解ける問題なんです。ね。

この詩のおもしろさである、二人のこの出会いのエピソードへのひねりというものが、実はもう、問題文の【文章Ⅱ】の中で種明かしされていて、決してこの二つの素材が有効に補充し合っているというイメージが持てない。つまり何か、複合問題をつくることだけが目的化さ



資料3

一斎の詩を読んでみますと「謬リテ文王ニ載セ得テ帰ラレ 一竿ノ風月心ト違フ 思フ君ガ牧野鷹揚ノ後 夢ハ碓溪ノ旧釣磯ニ在ラン」と言つて、もともとの『史記』の文章では、魚釣りを利用して西伯に仕官を求めようとしていたのは呂尚なんですから、それに対してこの詩では、「謬リテ文王ニ載セ得テ帰ラレ」、つまり本当は間違つて仕官したと思つているんじゃないの？ とちよつとまげ返したような、ざれ歌みたいな詩なんです。一斎にしたところで、それが呂尚の本心だとは当然思つていないはずなんです。問題文でも、「ある説として」と言つて、幕府の招きに応じて昌平齋に出仕したことを誤りだという自分の心境を投影しているのだと考えられます。つまりふうふうに言っていますが、まさにそのとおり、それは自分の心境なんです。ね。

問7 【文章Ⅱ】の傍線部C「佐藤一斎の漢詩は、【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を描きました。」とあるが、佐藤一斎の漢詩から

うかがえる太公望の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 第一句「謬りては、文王のために十分に活躍することはできなかったという太公望の控えめな態度を表現している。
- ② 第一句「謬りては、文王の補佐役になって股を討伐した後の太公望のむなしさを表現している。
- ③ 第二句「心と違ふ」は、文王に見いだされなければ、このまま釣りをするだけの生活で終わってしまったという太公望の回想を表現している。
- ④ 第二句「心と違ふ」は、股の勢威に対抗するために文王の補佐役となったが、その後の待遇に対する太公望の不満を表現している。
- ⑤ 第四句「夢」は、本来は釣磯で釣りを楽しんでたかったという太公望の望みを表現している。
- ⑥ 第四句「夢」は、文王の覇業が成就した今、かなうことなら故郷の碓溪の領主になりたいという太公望の願いを表現している。

れている、そんな印象を受けます。

恐らくこれは、制限時間内に問題を解かせるといふレベルで問題をつくると、この程度の問題しか出せない。つまり木に竹を接いだような問題しかつくれないんだと思います。こんな問題をつくることを要求されるのは、出題者がかわいそうになってくるような、そんなレベルの問題だと思います。

『史記』と一斎の詩を比べる、目のつけどころは非常にいいと思うんですね。しかしこの二つの素材に、それぞれの素材にきちんと向き合わせる余裕がないから、出題者自身が中途半端な種明かしをやって、片方だけ読んで、解答できる問題をつくらざるを得ない。別の見方をすれば、出題者の苦渋がしみ出しているような出題であると言えるかもしれません。

それで、新しい学習指導要領が二〇一八年に告示されて、今試行期とされているわけですが、共通テストのプレテストが二回行われたわけですが、それが新しい学習指導要領の方向性というものをある程度映し出しているかと解釈するならば、複数の素材をあわせてその情報処理をするという方向を目指していることは、かなり明らかかなのではないかと思います。

実際に新しい学習指導要領を読んでみると、「複数」というキーワードがたくさん出てくるんですね。「異なる形式で書かれた複数の文章や図表等を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことをまとめて発表したり、他の形式の文章に書きかえたりする活動」これは「現代の国語」です。時間がありますのであとは読みませんけれども、こういうふうな複数の素材を組み合わせることが、これが一つ大きな方向性と出ているかと思うんですね。

しかし、具体的な出題を見てみると、それが非常に浅いレベルで行われていて、きちんとした原文の読解を指しているとは思えない。まるで現代の、情報を手軽に処理するかのように古典を扱うということが、古典の読みを深める上で果たして適切なかどうか、私はこれは非常に疑問に思っています。恐らく大学の授業で古典ではなにかと思います。

学ぶ際に、こんな無意味な比較が重視されるとはとても思えない。大学入試というものが、大学で学ぶ能力を備えているか、そこを問うものであるとするならば、このような問題を出題することは、大学で行う学問に対して誤ったメッセージを送ることになるのではないかと感じています。

私自身は、複数の素材を組み合わせること否定するわけでもないし、それは非常に大事なことだと思っています。より深い理解とか、新たな発見には欠かせないプロセスです。『史記』と一斎の詩も、仮に教科書で取り上げればかなりおもしろい授業が期待できるような組み合わせではないかと思うんですね。ただこんな中途半端な情報処理をするよりも、きちんと素材に向き合うという当たり前のことが、理解を深める上で最も大事なことでないかと思います。

話し手のいない古典。古典というのは、話し手がいないんです。それを現代のテキストとある意味で全く同じように扱うというのは、とても理解を深める有力な方法にはなり得ないだろうと思います。

幸いなことに、この「複数」というキーワードは、「言語文化」のところにできていないようです。私、見落としているかもしれませんが、古文・漢文というのは、これは新要領で必修とされている「言語文化」を出題範囲とするものですから、だとすれば、学習指導要領の方向性に過度に迎合することなく、中途半端な複合問題はやめにして、読みの質そのもの、良質な問題を出題するという原点に立ちかえることは、全く指導要領にも抵触しないことだと思います。

これはプレテストで、いわば大学入試センターがテストのつもりでこういう問題を、試験のつもりでこういう問題を出したのかもしれませんが、やはり安直な複合問題を出さないということは、その原文にきちんと向き合うということを伝える非常に大事なメッセージになるはずで。

で、最後に未来に向けてということで、私たちの言葉というものも、数百年たてば、古代語になります。今のような方向性が定着してしまうと、数百年後の人たちが、私たちの言葉にきちんと向き合わなくなるのではない

か。そういう懸念を持っています。これでは私たちの言葉が古典となる道をみずから閉ざしているようなものだと。つまり古い言葉と私たちの言葉との間にあるつながりと断絶、それを適切に捉えて、素材ときちんと向き合う姿勢を未来へ継承すること、それが最も大事なのではないかと思えます。

断絶があるから完全にはわからないんですね。わからないからやはり考える。古典というのは、何か解釈が定着していると思われるかもしれませんが、決してそんなことはなくて、読み尽くされるものではなくて、決まっています。未解明の部分がある、これは宝の山なんですね。その一方、つながりがあるから発見が可能になる。その発見の楽しさというものを未来に伝えていくこと。これが今の私たちの大切な役目なのではないかと思えます。そうやって、数百年後の人たちが私たちの言葉を発見してくれることを願っています。

以上で私のお話を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

安藤 宏教授：大西さん、どうもありがとうございました。特に最後のところは、そのままシンポジウムのまとめになるのではないかと、すばらしいお話をしてくださいました。

新テストのいわゆる複合問題が、比べること自体が自己目的化してしまっているのではないかと、というのは、実は、古典・漢文だけではなくて現代文もまさにそうでありまして、多少、補うような情報をお話ししておく、皆さんご存じの方も多いと思うんですが、恐らく出発点は二〇一五年にOECD（経済協力開発機構）が公表した国際調査、生徒の学習到達度調査、PISA（ピサ）というものだった。そこで、日本の子供は複数の資料を読み解く力が著しく劣っている。平均点が下がっているというデータが出て、ここに文科省を初め、中教審のほか、改革をする側の方々がとてもこだわったんですね。

これは何とかしなければいけない、とにかく複数のものを比べなければいけない。情



報処理ができなければいけないという、そこから全部出発している。その結果、新テストもこのようなことが起こってしまいますし、現代文も、書いた人に対する敬意を欠くのではないかとというような比べ方ですね。強引な比べ方。素材に向き合うというよりは、出題者の、比べようとする意図を付度する力を受験者に聞いてくるようなおかしな方向に進みつつある。ほかの国に比べて、何かの能力が劣っていることに異常に敏感に反応して、過剰に反応して、その結果、日本中がおかしなことに今、なりつつあるような気がします。

これで一応皆さんの発表が終わりました。それぞれ大変興味深くて、実は予定の時間を超えてしまつて、残り二〇分しかないのですけれども、限られた時間、大いに語り合つて、ふだん我々が教授会の合間にどんな会話をしているか、その裏舞台を知つていただくというか、そこまでは言いませんけれども、楽しく議論をしていきたいと思えます。

ではまず、口火を切るような形で阿部さんからお願いできますか。

阿部 公彦教授：いろいろとうかがいたいところですが、まずは二つほどお訊きしたいことがあります。一番最後の



大西さんの、固有名詞の話というのは非常に面白かったですが、固有名詞というのは多分哲学のコンテキストで考えると、また違う深みを持ったテーマだと思えますし、きょう納富さんが、「私である」と言ったときの「私」も一種固有名詞として存在しているわけです。いみじくも、きょう沼野さんは、あの炎上議員、あれは固有名詞を間違えて炎上したわけですよ。あそこで、あの固有名詞の間違え方というのも、あれは多分大西さんの固有名詞の問題とすごく近いかもしれません。あのような指摘をしたこと自体が失礼に当たるといえる方もあえるのかもしれないと思えます。十七〜十八世紀の英語の作法書というのがあって、会話のとき、自分より身分が高い人とはどういふふうに話すべきかといったこ

とを指南していただきます。「ブック・オブ・シビリテイ」とか「コンダクト・マニユアルズ」と呼ばれるものです。それで、そういう本の中には身分の高い人が「例の象を使ってアルプス越えした、ほら、あれ、あれ」というふうに、例えば固有名詞が出てこないときに、どうやってその固有名詞を教えるか、みたいな作法が書いてあったりするんですよ。あるいは偉い人が、さっきの炎上議員みたいな感じで、名前を、「例の何とかなさんか、といったことも昔から問題になってきたようですよ。そこはおもしろいと思いました。ただそこで、固有名詞というのは一見絶対的な情報のように思えるんだけど、まさにその固有名詞にコンテキストという、非常に柔らかいというか、混沌としたものがくっついてくるというのは、これまたおもしろい。言葉の不思議な側面だなという気がしました。

大西さんのお話の一つの大きなポイントは、我々の、例えば読むということを考えたときに、文字を読む、に限らず、相手を読むとか、相手の心を読むというときには、コンテキストということが何より問題になるということだと思います。固有名詞のほうから入ってもいいですし、コンテキストというほうから入ってもいいんですけども、そのあたりに関して、皆さんちようど話がちよつと重なるところかなと思いました。納富さんの「言葉は私自身である」、それについてももし時間があれば、よろしく願います。

大西克也教授…言葉を理解するというのはどうということかというのと、やはり言葉を言葉だけで理解しているんじゃないんですね。そのコンテキストから来る情報というのが、これがものすごく大事で、我々は言葉とその環境、コンテキストを常に参照しながら言葉を理解している。だから僕は、新井紀子先生の『A I v s 教科書が読めない子供たち』を読んだときに、一つ大きく感じた違和感というのは、後半部分、リーディングスキルテストというのがありましたよね。あれは、コンテキストからやはり切り離されて言葉だけの理解でやっている。それは

非常に難しいことです。だからあれの点数が悪いことで一喜一憂する必要は、僕は全くないと思いますね。

私自身小学生のときに鶴亀算というものをやらされて、あれ皆さん覚えていらっしゃいますかね。全くもう理解できないんです。もう泣きそうになるんですね。父親が教育熱心で、夜会社から帰ってきて、黒板に書いて教えてくれるんですけど、ますますわからなくなりましたね(笑)。

ところが中学に入って、方程式を習ってますね、あ、こんな単純なことをこんな難しく言っていたのかと。これさっきの納富先生のお話とも非常に共通することかと思うんですけども、言葉は言葉だけではありません。

安藤宏教授…納富さん、いかがですか。

納富信留教授…まさに言葉というものには、コンテキスト、つまり、言葉を使っている場を考える必要があります。

これは、現代でもいろいろ大きな問題になっています。例えば、特に電子媒体のさまざまな通信機能で、特定の人にしか宛てていない文脈で書いたものが、想定外に拡散してしまうとか。そういういろいろなところで齟齬が生じています。また、意図したことと違うふううに受け取られるということが、余計深刻な問題となっていると思

うのですが、基本的に、言葉である以上、何らかのコンテキストを持っているということとは間違いありません。僕はこの人にしか言っていないという言葉も、別の人に読まれる可能性があるし、そういうことに対して、どう考えていくかというところが、いろいろな意味で試されている。これが、まず一つ、現代の問題としてあると思うのです。

もう一つ、コンテキストというものは、何度も読むことによって変わるといっても重要です。何か一つの文章があったら一つだけコンテキストがあると考えるのは大間違いで、この点も大西先生と私に共通ですが、古典とはそういうものでして、何度も何度も、



何千年も読まれているもので、一人の人間でも三度も四度も読むことによって違うふうに読まれていくものです。読む私たちも変わってくるからです。同時に、時代によって違うふうに読まれているのだしたら、やはり言葉には一つのコンテキストだけがあって、その正しいコンテキストを読み解くといった考え方は全く間違っている。いろいろな意味で間違っていると思うのです。

つまり、さまざまなコンテキストを読み解く力こそが重要なのであり、その意味で言うと、先ほど言った、最近のSNSのような問題も含めて、コンテキストの読み解きを意識する発信というのが重要なのではないかと思います。

安藤宏教授：文科省の改革の個別のことというよりも、むしろその背後にある世の中の大きなうねりというんでしょうか、とても怖いものを感じるんですけど、言葉のやりとりに関して、答えは常に一つでなければいけない、何かそういう脅迫観念というんですか、そういうのは昔からあったと思うんですけども、最近特に強くなってきているような気がする。とにかくわからないということが薄気味悪い。わかるようにしておかなければいけないという、それが論理という言葉がひとり歩きするような、そういう風潮になっているような気がするんですけどね。

いかがでしょうか。どなたでも。

沼野充義教授：いま安藤さんの言ったことに直接反応すると、文学をやっている人間というのは、いろんな問題に対して、答えは一つではないということを常に思っているわけですね。曖昧であること自体にむしろ意味がある。文芸批評家のエンプソンには、『曖昧の七つの型』という有名な著作もあります。文学作品については、一つだけの解釈が正しいなどとはとても言えない。ただし、それだと採点しにくいので、入試問題にも出しにくい。文



学は要らないと言いたがる人が出てくる理由の一つはそんなことかもしれません。

もう一つ付け加えますと、文脈、コンテキストの問題についてです。先ほどご紹介したヤコブソンの言語の機能についての理論においても、コミュニケーションの成立には最低六つの要素が大前提になっていて、その一つは文脈（コンテキスト）でした。ところが入試で問われるのは、実際のコンテキストなしに英会話をしろとか、実際の社会的現実を考慮することなく実用文を理解しろとか、そういった不自然な、人工的なことなんです。

社会的な状況に応じて言葉の使い方が変わってくるというのも、言葉に対する一種の社会的・政治的コンテキストの影響でしょう。大西先生がさすが中国語のご専門で、付度という言葉はもともどういうふうに使われていたかということの説明してくださいました。本来これはむしろ立派な意味を持つ言葉だったわけですが、最近の日本では意味が完全に変わってしまいました。大部分の辞書はまだそういう変化に追いついていないのですが、私の調べたところだと、三省堂の『現代新国語辞典』という、これは高校生向きの大変いい学習辞典なんです。この最新版（第6版）には、「付度」というのは、権力者の心の中を推しはかるだけではなくて、権力者が希望していることを「言われるまえに行う」という行為まで意味に含まれる（笑）、と記載されています。こういう最新の変化まで取り込もうとする編者の国語学の篤実な先生方の努力には頭が下がりますが、世の中の悪しきコンテキストの影響を受けて言葉の意味がこんな風になってしまうのは嘆かわしいことです。

最後にもう一つ、余談というか、面白いエピソードをご紹介します。「丸い三角」ということが納富先生のお話に出てきて、これですぐに思い出したのがロシアの文豪ドストエフスキーのことです。彼の『罪と罰』という小説の主人公ラスコリニコフの部屋に「丸い楕円形のテーブル」があると書かれていますね。これはどう考えても書き間違いではないかと思つて、（まあこれは伝説みたいなものですが）編集者が、『丸

『はい』は取ったほうがいいんじゃないですか」と聞いたというんですが。ドストエフスキーはしばし考えたらうえて、「いや、このままにしよう」と答えたとか。

ところが、ドストエフスキーを日本語に訳してきた歴代翻訳家たちは、論理的にものを考えるとやはりこれはおかしいと思って、みな「丸い」を勝手に削ってしまった。ですから翻訳では「丸い楕円形のテーブル」ではなく、すっきりと「楕円形のテーブル」となっています。文学作品の表現というのは、こんなふうな、形式論理では片づけられない複雑なものがあるといういい例でしょう。

阿部公彦教授…もし哲学の分野から説明があればお聞きしたいところなんですけども、多分何を言っても言葉というのは意味してしまう特性がありますね。例えば「東大にだまされた」とか「東大はばかだ」とか言っても、論理的に考えると変なんですけども、何か意味を想像できてしまいますし、伝わってしまう。今日はどうしても、人文学対財界みたいな話になりつつあるんですけども、それはあまりよくなくて、財界の人にとっても、人文学の人がねねち考えているようなことというのは非常に大事だし、今のような言葉の機能というのは、ビジネスの世界でもおおいに関係する。むしろそういうところでこそ経済は動いているし、人間も生きているんだと思います。

だから、「言葉は道具だ」とか、「実用英語が一番」とか言っている人に、どうやって納得できる形で伝えるかというところが次のステップになるかなと思うんですけども、そういうこともぜひ伺いたいです。

一つだけちょっと例で言うと、先週もちょうど「英語民間試験はけしからん」という決起集会があったところで、きょうもいらしてくださいださっている方が聴衆の中におられますが、英語方面では、すぐ実用英語みたいな話が出ます。確かに学校で習った英語が外国に行くとうまくいかないとか、あるんですね。そこですぐ、では実用英語、使える英語、使える道具という話になる。でも、具体的に見ていくと、本当に大事なものは、これがまさに納

富さんがさっき言及した話につながるのですが、実用英語ではなくて、実存英語なんです。システムを閉じたものとして見て、そのシステムを理解するというのは、学校の勉強である程度できるんですけども、そのシステムに自分が巻き込まれているときの言葉の運用というのが意外と難しい。ごく単純な「ちょっとそこにあるのを取って」とか、「ちょっとあそここの向こうにあるあれさ」とか、「あれコピー用紙どこにあるの？」みたいな英語が難しいんです。

なぜ難しいかという点、自分の位置というのは常に変わる。その物と自分の位置が関係してくる言葉というのは、英語に限らず、日本語でも難しい。かつ言語によって微妙に違うんですね。そのスタンスが、つまり世界との関係のとりかたが違うので。そこでいろいろと障害が生じるんだらうなと思います。さっき「言葉は私自身だ」と納富さんがおっしゃったときに、そういうことも多分含まれておっしゃっていたんだと思うんですけども、いかがでしょう。

あと、ついでに、どなたでもいいんですけども、どうやって「言葉は道具だ」みたいなことを言う人を説得するか、ということに関してアイデアがあるでしょうか(笑)。



さというものが失われていくような気がします。やはり言葉と魂との関係ということ、忘れないようにしたいなと思っております。

安藤 宏教授…一連の改革論議の中でよく出てくる言葉、論理、実用、文学という言葉が、いかにも軽いんですね、使われ方がね。その時々によって、その文脈に都合よく、言葉がひとり歩きしてしまって、反論するにも、どう反論していいかもわからなくなってしまうような、軟体動物を相手にしているような気がするんですけど(笑)、もう少し言葉を考えて使わないと。例えば、以前に出たシンポジウムでも出た意見なんですけれども、「論理」と「文学」というふうに分けてしまった段階で、パブリックな、権力の問題ですからね。分けてしまった瞬間に、ああ、その二つは違うものだという、そういう発想がひとり歩きしてしまう、これが一番怖いような気がしますね。

沼野 充義教授…納富先生の言われたことの中で、やはりさすが哲学をやっている人はすごいなと思ったんですが、魂という言葉が出てきて、コミュニケーションというのは、単に言葉を道具として使っているんじゃないかと、魂と魂の触れ合い、ぶつかり合いだということは、まさにその通りだと思います。ちょっと気恥ずかしくて、普通使えないですよ、魂って(笑)。ただ、私のやっているロシア文学だと、魂という言葉は異常にたくさん出てくるんです。これは、英語で言えばソウルですけど、私の自説は、アメリカの黒人とロシア人というのは、世界で二大「魂が好き民族」ということです(笑)。いずれにせよ、人間にとって口先だけの言葉ではコミュニケーションできない部分が大いということ、忘れてはならないでしょう。

コミュニケーションについても一言だけ補足すると、二、三年前に、地方のある大学に呼ばれて講演をしまして、言葉とコミュニケーションという話をしたんですが、相手が悪かったのか、なにしろTOEICの対策講座のような授業の学生たちで、終わってからある学生が文句を言いに来た。「先生は講義の中で、人間のコミュニケーションでは、うまく理解し合えないことが多い、外国語というのはそういうものだから、それを前提にして考えなければいけないと言ったけれど、私はそれは違うと思う。言葉は通じるものです。私はちゃんと英語を勉強しているから、ちゃんと相手の言うことも理解できるし、会話もできます」と言うんですね。それだけばかり教師に反論する学生がいるというのは、大変立派だとは思いますが、民間試験でいかに高い点を取るかしかなかったような教育はどこか根本的に間違っているのではないかと(笑)とも思っています。

文学は、人間がいかに通じ合えないかということを取り上げてきたわけです。尾崎放哉に有名な「咳をしても一人」という自由律俳句がありますね。別に誰かに悩みを訴えたいわけじゃないんだけど、咳を誰かが聞きつけてくれたらね、「大変ですね」とか言ってもらえるわけでしょう。ところが放哉は全くのひとり暮らしで、咳をしても誰からも声をかけてもらえない。コミュニケーションができない状況です。放哉の場合は自分で自分をそこまで追い込んでしまったんでしょうけれども。

今活躍している川上未映子さんという優れた小説家の最近作に、『夏物語』というものがあります。この最初のほうに——これは芥川賞受賞短篇の『乳と卵』にもともと入っていたエピソードですが——場面緘黙症と呼べそうな子供が出てきます。場面緘黙症というのは、口はきけるんですけども、特定の相手にだけ口がきけなくなる症状です。悪ふざけでやっているわけではない、本当に一種の病気なんです。川上さんの小説では、緑子という女の子が学校では普通にしゃべっているのに、親に対してだけは絶対口がきけなくなってしまう。優れた文学というものは、そういうものにむしろ向き合おうんです。そこに人間の魂の大事なところがある。だからつづることができるだけがコミュニケーションではないということでしょう。

安藤 宏教授…今の沼野さんのお言葉が全体のまとめにもなっているような気がするんですが、とにかく言葉という



のは誤解が宿命で、通じないものなんだと。でも通じないからこそ、そこに切なさや悲しさや、次の努力が生まれてくるので、だからこそ文学があるわけですけれども、どうもそのあたりが、世の中全体の風潮として、何かわからなくなってきたりして、ないがしろにされている。あるいは目先の通りやすさ、わかりやすさが優先されるようになってきてしまっている。

そういう中で、最後にちょっと面はゆいのを我慢して言いますと、そこにこそ我々文学部の意義や使命があるというんでしょか。絶望しないで声を大にして言い続けたいというの大切さがあるのかなという気がいたします。

あつという間に時間になってしまいました。もう一瞬で二時間たつてしまつてびっくりです。登壇者の皆さんどうもありがとうございました。

それでは最後に、まとめの言葉として、きょうはあくまでもパネリストだということで自己限定されていたんですけれども、文学部長の大西さんにお言葉をいただきたいと思えます。

大西 克也教授：本日は、天気もあまりよくない中、大勢の皆さんにご参加いただきまして、本当にありがとうございます。先ほども安藤さんがおっしゃったように、言葉というのは通じないものなんですね。通じること前提にして考えるのではなくて、その通じなさに焦点を当てて考えていくことが、文学部がこれから社会に存在して行く意義の一つではないかというように感じております。

お手元のアンケート、世の中にはいろんな考え方がありますから、私たちにとって厳しいご意見をお持ちの方もいらっしやるかと思えますので、どうぞアンケートの中にご記入していただければと思います。本日は本当にどうもありがとうございました。

安藤 宏教授：それではこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。



ことばの危機

2020年1月21日

発行者 東京大学文学部

発行所 ヨシダ印刷株式会社
